宇都宮市埋蔵文化財調査報告第20集

上欠南遺跡

昭和61年3月

宇都宮市教育委員会

発刊にあたって

宇都宮市の西部を南流する姿川の流域には，多くの古代遺跡が存在しています。特に縄文期の遺跡に関しては，市内でも濃密な分布地域として古くから注目を集め，台耕上遺跡，上欠遺跡，高尾神遺跡など発掘調査が実施されたものも数多くみられます。なかでも上欠遺跡は，昭和52～53年の団地造成に伴う発掘調査（県教育委員会）により，縄文期の住居跡・土坑が多数検出され，県内でも屈指の集落跡であることが明らかにされています。このたび，この上欠遺跡の南に隣接する部分が宅地造成により現状変更されるおそれがでてきました。

上欠遺跡の集落跡は，発掘調査によりさらに南北へ拡っているおそれがあるということから，今回の宅地造成予定地もその範囲内にあることが十分に予想されました。そこで，当教育委員会としては，埋蔵文化財を重視する立場から造成予定地の土地所有者，文化庁及び栃木県教育委員会をはじめとする関係機関と協議を重ね，「上欠南遺跡」として発掘調査を実施しました。

発掘調査は，国庫及び県費補助を得て国士館大学教授の大川　清先生，本市文化財保護審議委員会委員の塙　静夫先生，並びに栃木県教育委員会文化課・栃木県立博物館・財団法人栃木県文化振興事業団の専門職員諸氏の御指導・御助言をいただきながら当教育委員会社会教育課があたりました。

発掘調査の結果，縄文時代前期の竪穴住居跡１軒，同じく円形土坑１基，それに炭焼窯が検出されました。竪穴住居跡は，該時代のものとしては県内でも検出例が非常に少ない貴重なものでありました。この成果は，本報告書に記録いたしましたので御活用いただければ幸いです。

なお，当教育委員会では，今回の調査結果を基礎資料として，本遺跡周辺が今後とも保存されるよう関係各位と協議していきたいと考えております。

末文になりましたが，調査にあたり御指導いただきました上記の大川・塙両先生と３機関，また，なにかと便宜をお図りいただきました土地所有者の佐藤氏（市内上欠町701番地）に対しまして深くお礼申しあげます。

昭和61年３月

宇都宮市教育委員会教育長　後　藤　一　雄

例　　言

1　本書は宇都宮市上欠町1205番地に所在する上欠南遺跡の発掘調査報告書である。なお，本遺跡の名称については，当初，宇都宮市遺跡台帳の『上欠団地遺跡』を使用していたが，昭和52・53年に実施された同団地造成に伴う発掘調査（栃木県教育委員会）が『上欠遺跡』として報告（昭和60年）されていることから，その南に隣接するということで『上欠南遺跡』としたものである。

2　発掘調査は，宇都宮市教育委員会が主体となって昭和60年10月１日～11月30日まで実施したものである。なお，本調査は国庫・県費の補助事業である。

3　遺構の実測図及び写真図版の作成は金田信夫の協力を得て梁木誠がこれにあたった。また，遺物の整理及び拓本図・写真図版の作成については栃木県立博物館学芸員・上野修一氏，また石器等の鑑定は栃木県立博物館研究員・荒川竜一氏にそれぞれお願いした。記して感謝の意を表する。

4　本書の執筆分担は，Ⅳ－１－(2)，Ⅳ－４，Ⅳ－５が上野修一氏，それ以外の部分が梁木である。上野氏には，出土遺物に関する数多くの分析をお願いした。心より感謝する次第である。

5　発掘調査の関係者は次のとおりである。

助　言　者	国士館大学教授				大川　清
	宇都宮市文化財保護審議委員会委員				塙　静夫
事　務　局	社会教育課長	加藤　悦男	（調査員）文化振興係		定岡　明義
	文化振興係長	小林　錦一	〃		手塚　英男
	文化振興係	渡辺　卓	〃		阿部　信弘
	〃	斉藤　全男	〃		梁木　誠
調 査 員 補					金田　信夫
調査補助員	安生　サキ	安生　ミカ	小林　マサ	小林　ミキ	斉藤　イク
	島崎　熊夫	福田　カネ	福田　タイ	福田　タイ	堀田　一夫
	松本恵美子	松本　和子	松本　トシ	松本　トリ	味野和テツ
	森　ヒロ子	谷中　一郎	山崎　トキ	渡辺　フミ	

なお，発掘調査及び報告書作成に際しては，次の方々から御援助，御教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である。

財団法人福島県文化センター・芳賀英一氏，長嶋雄一氏，財団法人栃木県文化振興事業団・岩渕一夫氏，岩上照朗氏，初山孝行氏，芹沢清八氏，塚本師也氏，鈴木実氏，栃木県立博物館・橋本澄朗氏，宇都宮市文化財調査員・松本笑悦氏，上野とも子氏，宇都宮大学学生・津布楽一樹氏，大正大学学生・高橋孝夫氏。

目　　次

・発刊にあたって
・例　言

Ⅰ　調査に至るまでの経過…… 1

Ⅱ　位置と環境
1　遺跡の位置…… 2
2　遺跡をとりまく環境
(1)　周辺の地形…… 2
(2)　周辺の遺跡…… 3

Ⅲ　調査の方法と経過
1　調査の方法…… 7
2　調査の経過　――発掘日誌抄――　…… 9

Ⅳ　検出された遺構と遺物……12
1　住居跡
(1)　遺構……12
(2)　遺物……16
2　円形土坑……28
3　炭焼窯……28
4　各グリッド出土の遺物
(1)　土器……29
(2)　焼成された粘土塊……38
(3)　石器……39
5　出土遺物についての分析
(1)　土器の分類……39
(2)　土器の編年的位置……41
(3)　石器について……42

Ⅴ　まとめ……43

挿　図　目　次

第１図　上欠南遺跡位置図…… 1
第２図　上欠南遺跡周辺の地形図…… 3
第３図　上欠南遺跡周辺の遺跡分布図…… 5
第４図　グリッド配置図…… 8
第５図　Ｇ－11グリッドｂトレンチ南面の土層図…… 9
第６図　各グリッド土器片出土数……12
第７図　第１拡張区遺構配置図……13
第８図　住居跡実測図……14
第９図　住居跡内出土土器の類別と出土層位……16
第10図　住居跡出土土器拓影１……18
第11図　住居跡出土土器拓影２……19
第12図　上欠南遺跡出土石器実測図……27
第13図　円形土坑実測図……28
第14図　炭焼窯実測図……28
第15図　住居跡内出土土器の類別と出土層位……29
第16図　第１群１・５ａ・５ｂ類及び２・３類土器分布図……30
第17図　第１群４・５ｃ～５ｉ・６類土器分布図……30
第18図　第２群土器分布図……30
第19図　土器片の接合・同一個体の分布関係図……30
第20図　各グリッド出土土器拓影１……32
第21図　各グリッド出土土器拓影２……33

表　目　次

第１表　上欠南遺跡周辺の遺跡一覧…… 6
第２表　住居跡柱穴規模一覧表……15

図　版　目　次

PL１　(1)　遺跡遠景
(2)　遺跡を載せる台地の断面
PL２　(1)　グリッドの設定状況
(2)　試掘状況

PL 3　(1)　住居跡確認状況
(2)　住居跡遺物出土状況
PL 4　(1)　住居跡全景 1
(2)　住居跡全景 2
PL 5　住居跡出土土器 1
PL 6　住居跡出土土器 2
PL 7　上欠南遺跡出土石器
PL 8　各グリッド出土土器 1
PL 9　各グリッド出土土器 2
PL10　焼成された粘土塊

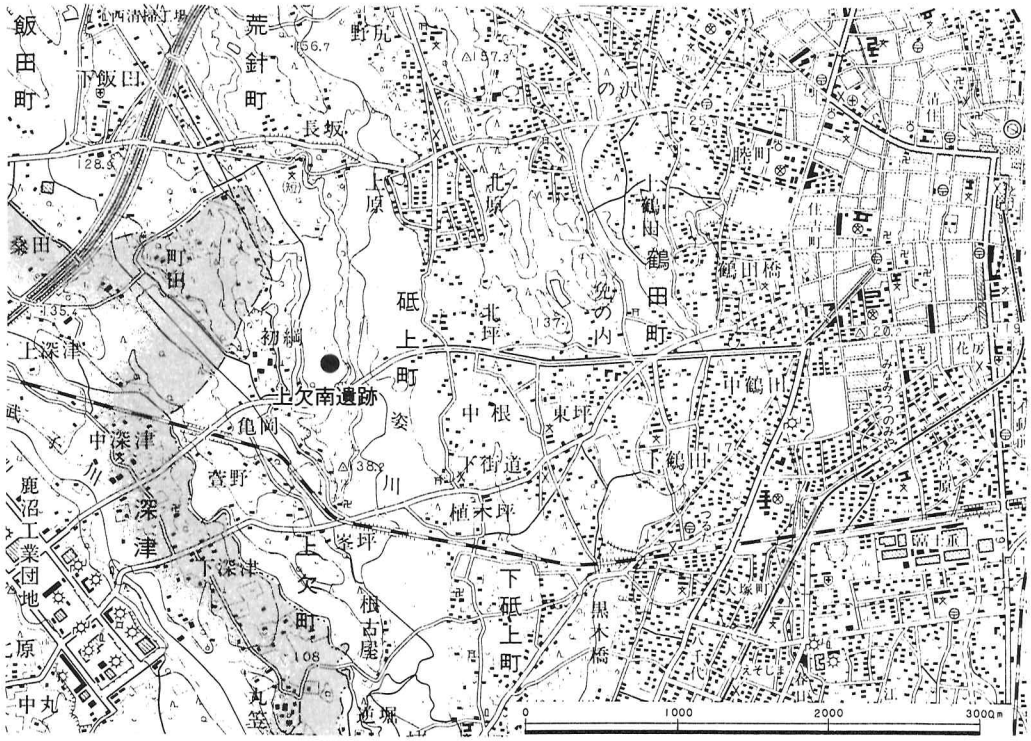
※　PL 5 ～PL 9 の遺物配置は，各挿図（第10～12図及び20・21図）のそれに照合する。

Ⅰ　調査に至るまでの経過

本遺跡を含む姿川上流域は，縄文期の集落跡が数多く分布する地域であり，発掘調査もいくつか行なわれている。なかでも，昭和53年，住宅団地造成に伴って行なわれた「上欠遺跡」の発掘調査においては，縄文中期を中心とした大集落跡が検出されている。この調査においては集落のかなりの部分が検出されているが，その拡がりは調査区域外へさらに延びる様相を示しており，特に南北方向への延びが考えられる。このことから，同台地上で約200m南に位置する本遺跡において，この上欠遺跡の続き，あるいはまたこれに関連する集落跡等の検出が十分に予想されたわけである。

このような状況の中で，現在山林になっている本遺物の一部が，宅地として造成されることになった。そこで，宇都宮市教育委員会では，昭和59年10月より数回に渡って現況調査を行うとともに，その取り扱いについて文化財保護の立場から協議を進めた。翌60年１月，栃木県教育委員会文化課とも協議した結果，発掘調査によって記録保存することと決定し，土地所有者である佐藤氏からも快諾を得ることができた。

以上のことにより，宇都宮市教育委員会では，昭和60年度国庫・県費補助事業として，同年10月１日から約２ヶ月間の予定で発掘調査を実施することとした。



第１図　上欠南遺跡位置図（１：50,000）

Ⅱ　位置と環境

1　遺跡の位置

本遺跡は宇都宮市上欠町1205番地に所在する。宇都宮市の市街地から西南西へ約４㎞の地点であり，さらに西方へ約１㎞で鹿沼市内となる。宇都宮市内から東北縦貫自動車道路鹿沼インターへと続く取り付け道路（通称楡木街道）がすぐ南側を走り，また，北側には栃木県住宅供給公社によって造成された上欠団地が拡がっている。本遺跡と取り付け道路の間には，大がかりな土取り跡が残っており，遺跡の位置の一つの目安となっている。本遺跡へは，この土取り跡の中央を通るように取り付け道路から北へ折れる小道が続いており，約400ｍで達する。

本遺跡の占地は，ほぼ南北にのびる舌状台地の南端近くで，やや東斜面よりである。また，本遺跡を載せる台地の東方を南流する姿川へは，約0.4㎞で達する。このため，本遺跡上に立つと，東方には宇都宮市街地の町並が，また，南西方には姿川によって切り開かれた水田地帯が一望できる。

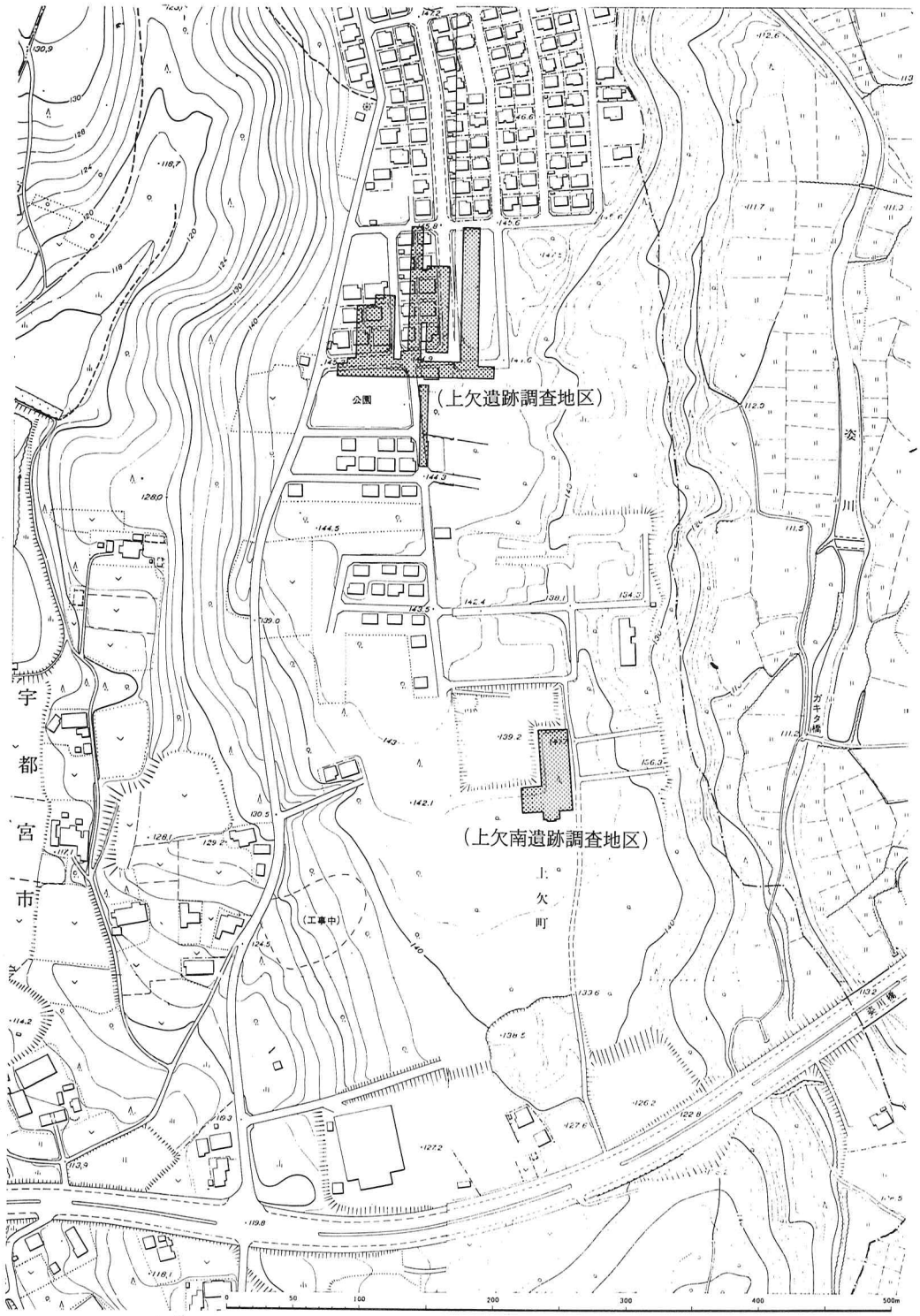
2　遺跡をとりまく環境

(1)　周辺の地形

宇都宮市の地形は，大きく，北部の山地及び丘陵地帯と中南部の平地地帯とに分かれる。後者はさらに，南流するいくつかの河川によって数条の台地と低地に分かれており，このうち台地は東から鬼怒川左岸の清原台地，鬼怒川と田川に挟まれた宇都宮東部台地（岡本台地，田原台地），田川と姿川に挟まれた宇都宮西部台地（宝木台地）そして姿川右岸の鹿沼台地とそれぞれ呼称されている。

本遺跡が立地するのは，前記した台地中最も西に位置する鹿沼台地上である。この鹿沼台地は，姿川の右岸から鹿沼市黒川の左岸にまで及ぶかなり広大なものであり，宝積寺ローム以降の火山灰をのせている。この台地の東端は，鹿沼市の最東端を南流する武子川で開析された中央部よりも一段低い段丘面となっており，本遺跡はこの面に立地している。

本遺跡をのせる台地は，南北にのびる舌状台地で，東側に姿川の沖積低地，西側に小河川によって開析された細長い谷底面を望んでいる。本遺跡が位置するのは，この台地南端から0.8㎞程北の台地上平坦部である。遺跡付近の標高は142ｍ前後であり，東側の沖積低地面及び西側の谷底面とは共に約30ｍの比高差をもっているが，台地斜面は西側が緩やかに谷底面に至っているのに対し，東側はかなり急斜面となっている。また，台地上平坦部の幅は約200ｍであり，本遺跡はややこの東斜面寄りに位置している。なお，本遺跡の北方約250ｍの上欠遺跡付近もほぼ同様な地形を呈している。



第２図　上欠南遺跡周辺の地形図（１：5,000）

(2) 周辺の遺跡

本遺跡周辺，すなわち姿川の上流域には，各時代にわたって多数の遺跡が所在している。なかでも縄文期の遺跡数は多く，宇都宮市周辺においてもその密度では目を引くものがある。特に，樹脂状の細長い谷が幾筋にも入り込む姿川右岸の台地上には，分布図（第３図）でもわかるとおり，台耕上遺跡（１），長坂天王寺遺跡（２），上欠遺跡（８），本遺跡，富士山台遺跡（11），聖山公園遺跡（17）とほぼ間断なく縄文期の遺跡が続くという状況である。ここではこれら縄文期の遺跡の中から，発掘調査等でその内容の明らかになっているものをいくつか紹介することとしたい。

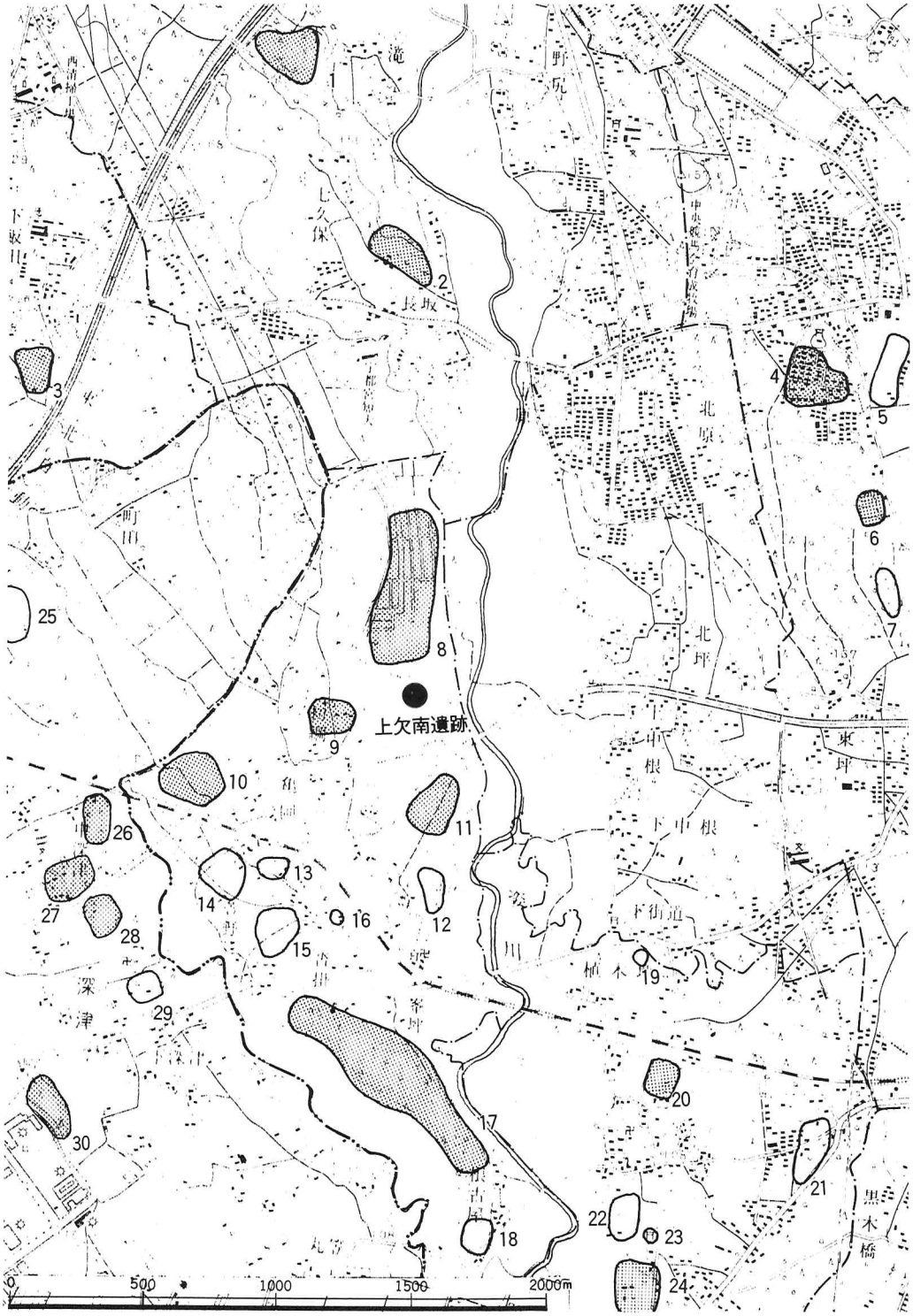
台耕上遺跡（１） 昭和44～45年，東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査が行なわれ，竪穴住居跡１軒と土壙９基が検出されている。竪穴住居跡は3.97×2.84mの不整楕円形，土壙はほとんどが袋状を呈するものであり，いずれも出土土器から縄文中期の加曽利ＥⅠ式期に比定されている。なお，わずかながら阿玉台式，加曽利ＥⅡ式の土器も検出されている。

高尾神遺跡（10） 昭和49～50，日本窯業史研究所が主体となって発掘調査が行なわれ，竪穴住居跡19軒，袋状土壙11基等が検出されている。竪穴住居跡の平面形は４×６ｍほどの楕円形が主体を占めているが，円形・隅丸長方形のものもいくつかみられる。また，土壙では袋状以外に円形，すり鉢状，楕円形等のものも検出されている。出土土器は，縄文中期の阿玉台式，加曽利ＥⅠ式が主体であり，その他石器類も豊富に検出されている。

上欠遺跡（８） 昭和53年，住宅団地建設に伴う発掘調査が行なわれ，竪穴住居跡52軒，配石遺構13基，屋外土器埋設遺構24基，ピット244基等が検出されている。竪穴住居跡の平面形は円形と楕円形が主体を占め，床面からは円形や方形の石組炉が多数検出されている。また，ピットには，袋状，円筒状，鍋底状等のものがみられ，袋状のものにはさらに小ピットが検出されたものが多い。出土土器は縄文中～後期の加曽利Ｅ式，称名寺式が主体である。なお，打製石斧，石鏃，石皿，凹石等の石器類の出土も多く，特に766点にものぼる打製石斧の出土は注目に値する。

聖山公園遺跡（17） 昭和57年より，霊園墓地造成に伴い本市教育委員会が主体となり発掘調査を行っているもので，現在も継続中である。古墳時代後期の集落と円墳群が中心の遺跡であるが，昭和59年度の調査において縄文前期の竪穴住居３軒と土坑２基を検出している。竪穴住居の平面形は，いずれも６本の主柱穴を配した隅丸長方形であり，最も大きいもので6.7×4.8mの規模を有する。出土土器は縄文前期後葉の黒浜式が主体であり，石鏃，凹石等の石器類が伴出している。なお，今年度（昭和60年），同地区周辺を確認調査したところ，さらに数軒ほどの竪穴住居跡を検出しており，該時期の集落構成を知る上で貴重な資料となることが，期待できるものである。

羽黒下団地遺跡（４） 昭和43年，宅地造成のために遺跡が破壊された際，10基の袋状土壙が検出されている。土壙の大きさは，口径0.8～1.5m，底径1.5～２ｍ，深さ0.5～１ｍのものであり，底面に小ピットを設けたものもみられる。土壙内から検出された土器は，縄文中期の阿玉台



第3図　上欠南遺跡周辺の遺跡分布図（1：25,000）（網は縄文期または縄文期を含む遺跡）

番号	遺跡名	種別	時期	遺跡番号
1	台耕上遺跡	集落跡（住居1，土坑9）	縄文中期	155
2	長坂天王寺遺跡	集落跡	縄文	156
3	高田遺跡	集落跡	縄文・古墳	158
4	羽黒下団地遺跡	集落跡（土坑10）	縄文中期	161
5	鶴田中原遺跡	集落跡	古墳	160
6	長峰遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	162
7	亀ヶ窪古墳群	古墳（円墳4）	古墳後期	163
8	上欠（団地）遺跡	集落跡（住居25，土坑120等）	縄文中期	164
9	初網遺跡	集落跡	縄文中～晩期	165
10	高尾神遺跡	集落跡（住居19，土坑11）	縄文中期	166
11	富士山台遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	167
12	稲荷古墳群	古墳（前方後円1，円墳3）	弥生・古墳後期	175
13	亀岡前古墳群	古墳（円墳5）	古墳後期	170
14	亀岡坪遺跡	集落跡	奈良・平安	168
15	沓掛遺跡	集落跡	奈良・平安	169
16	定使古墳	古墳（円墳1）	古墳	171
17	聖山公園遺跡	集落・古墳（住居37，土坑30，円墳7）	縄文前～後期・古墳	
		昭和60年現在	後期・奈良・室町	(173) (177)
18	犬飼城跡	城館跡	室町	183
19	植の内古墳	古墳（円墳1）	古墳	172
20	宿坪遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	174
21	並塚遺跡	集落跡	古墳	178
22	主計内遺跡	集落跡	奈良・平安	184
23	下砥上愛宕塚古墳	古墳（円墳1）	古墳後期	185
24	ひのき内遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	186
25	町田古墳群	古墳（円墳7）	古墳	
26	京光地遺跡	集落跡	縄文中期	（鹿沼市内）
27	狢内遺跡	集落跡	縄文中期・弥生・古墳	
28	深津堀の内遺跡	集落跡	縄文中～後期	
29	深津城跡	城館跡	中世	
30	前橋遺跡	集落跡	縄文中・晩期	

第1表　上欠南遺跡周辺の遺跡一覧表（遺跡番号は宇都宮市遺跡台帳のもの）

式，加曽利ＥⅠ式である。

長坂天王寺遺跡（２）　縄文前期の諸磯式から中期の阿玉台式，加曽利ＥⅠ式といった土器が多くみられ，石鏃，石錐，打製石斧，石錘，敲石，石皿などの石器類も出土している。

初網遺跡（９）　縄文中期の加曽利ＥⅠ，ＥⅡ式，後期の堀之内Ⅰ式，加曽利ＢⅠ，ＢⅡ式，晩期の安行Ⅲａ式といった土器とともに豊富な石器類がみられる。

引用・参考文献

塙　静夫　「縄文時代」『宇都宮市史』原始・古代編　宇都宮市史編さん室　昭和53年

中村紀男　「台耕上遺跡」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』　栃木県教育委員会　昭和47年

大川　清　「高尾神遺跡」『栃木県史』資料編・考古１　栃木県史編さん室　昭和51年

岩渕一夫・初山孝行他　『上欠遺跡』　財団法人・栃木県文化振興事業団　昭和60年

『聖山公園遺跡Ⅲ』　宇都宮市教育委員会　昭和60年

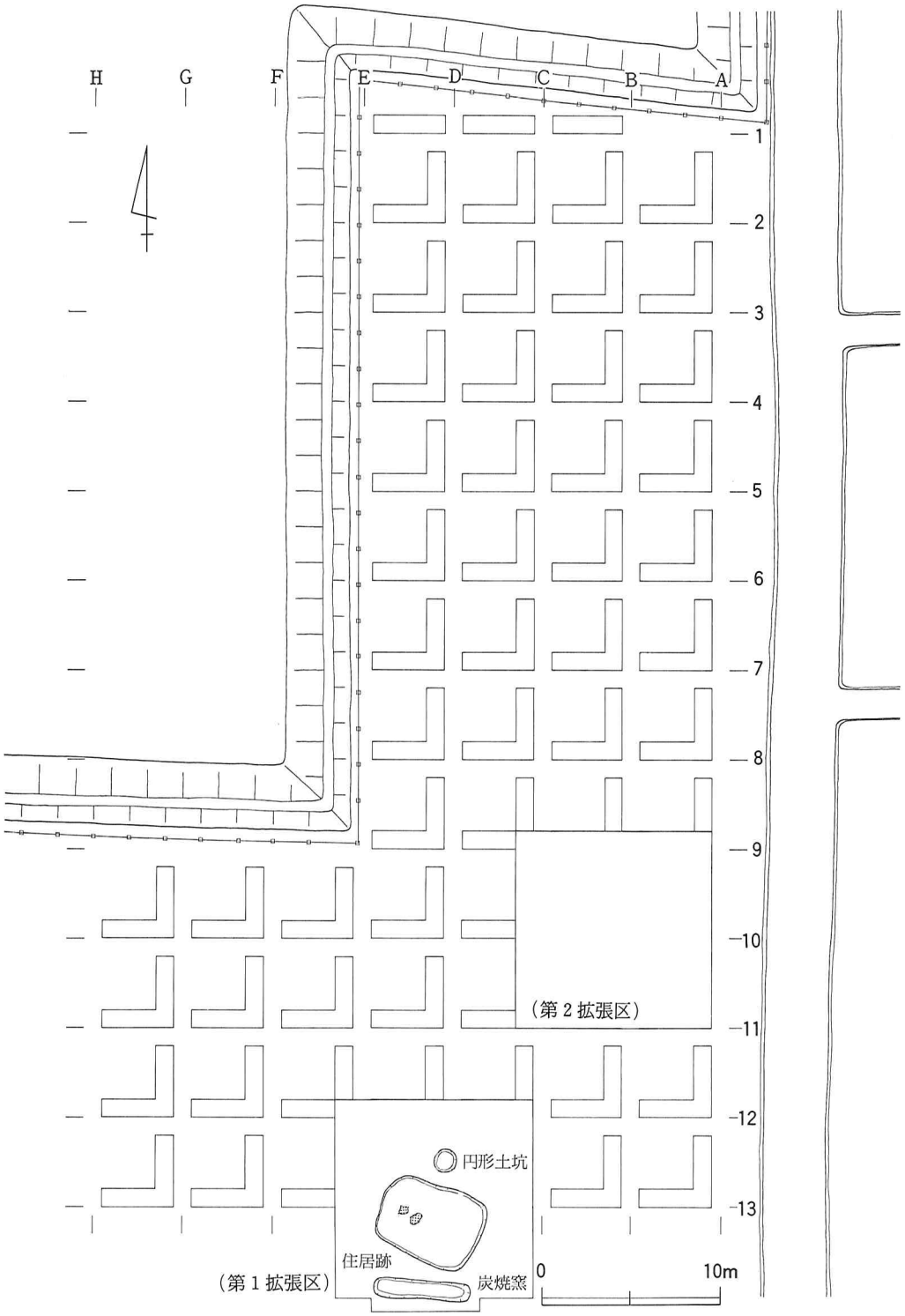
Ⅲ　調査の方法と経過

１　調査の方法

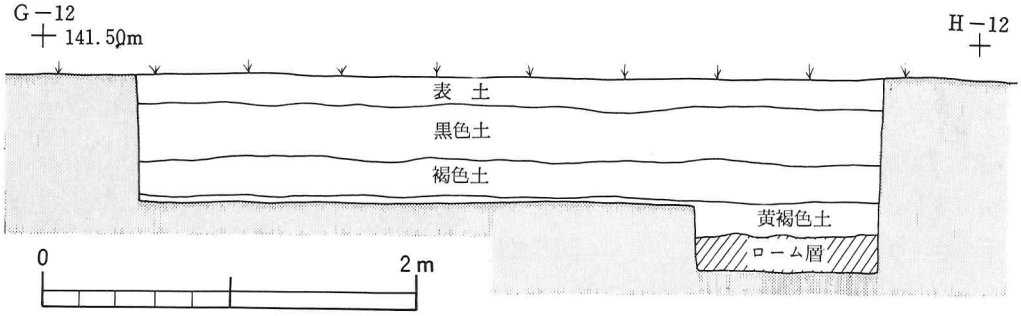
調査区は第２図で示したとおり南北に長い「」」状の形である。広さは，南北が最大長60ｍ，東西が北半の狭い部分で25ｍ，南半の広い部分で40ｍを測り，総面積は約1,500㎡である。台地全体が緩やかに南へ下がっていることと，本調査区が台地の東側斜面寄りに位置していることから，北西から南東への緩やかな傾斜地となっているが，調査地内での比高差は４～50㎝程度であり，ほぼ平坦に近い土地である。

調査の方法としては，まずグリッドを調査区全体に設定することとした（第４図参照）。グリッドは前記した土地の形状等を考慮して一辺５ｍの方眼とし，主軸も土地に合わせるような形とした。このため，設定したグリッドの主軸方向はＮ－２°－Ｅである。設定したグリッドには東西方向にアルファベット（ＡＢＣ……），南北方向に数字（１２３……）を配し，各グリッドの呼称については北東コーナーの組み合せ（例えばＡ－１グリッド）を使用することとした。次に，調査の効率を上げるため各グリッド内にさらに幅１ｍの「」」状のトレンチを設定して遺構等の検出にあたることとし，呼称は南北方向のものをａトレンチ，東西方向のものをｂトレンチとした。以上のように，グリッドとトレンチを併用した形でまず確認調査を進めることとし，遺構が検出された部分あるいは遺物の集中した部分を中心に拡張して行くこととした。

また，調査地内の標準堆積土層は第５図に示したとおりであり，表土から第３層目の褐色土層が遺物を多く包含する層である。しかし，この層での明瞭な遺構の検出は困難であったため今回



第４図　グリッド配置図



第5図　G－11グリッドbトレンチ南面の土層図

の調査ではその下層の黄褐色土層（ローム漸移層）の上面まで掘り下げて遺構の検出にあたることとした。なお，地点により多少の差はあるが，表土からローム層までの深さは概ね80cm前後である。

2　調査の経過

今回の調査地はかなり密に杉が植林されていたため，発掘に先だってまずこれらの伐採を行なわなければならなかった。この伐採作業には枝の焼却や材木の持ち出しが伴うため，9月25日から28日の4日間を用した。伐採作業終了後の9月30日にグリッドの設定と簡単な地形測量さらにテントの設営などを行ない，ほぼ準備を完了した。10月1日からの発掘調査については以下の発掘日誌抄で示すとおりである。

――― 発 掘 日 誌 抄 ―――

10月1日（火）　発掘調査開始。まず，調査地内の標準堆積土層を知るために，G－11グリッド，A－11グリッド，C－1グリッドの三地点において土層調査を行った。この結果，各グリッドではローム漸移層（黄褐色土層）まで掘り下げ，遺構・遺物の検出を行うこととした。調査地南西部のG－9～12グリッドより掘り下げを開始した。

10月2日（水）　F－9～12グリッドの掘り下げ。各トレンチとも土器片が1～2点出土する程度で全体に遺物は少ない。

10月3日（木）　E－9～12グリッドの掘り下げ。E－11・12グリッドでは土器片が3点とやや多く出土し，またE－9グリッドでは川原石も出土した。いずれもローム漸移層より上の褐色土層中からの出土である。

10月4日（金）　D－9～12グリッドの掘り下げ。D－12グリッドの南東隅において遺構のプランを確認。確認面は褐色土層の下位であり，炭化物を多く含む黒色土のプランがさらに南へ延びる様子で検出できた。また，周辺からは土器片も他に比較して多く出土した。D－10・11グリッドでは，川原石が2～3個ずつ出土したが，いずれも褐色土層の上半であり，遺構確認面の直上あたりと判断した。

10月７日（月）　Ｃ－９～12グリッドの掘り下げ。Ｃ－12グリッドの南西隅において，Ｄ－12グリッドで確認した遺構プランの続きを検出した。他は，遺物も少なく遺構も確認されない。

10月８日（火）　Ｂ－９～12グリッドの掘り下げ。Ｂ－９グリッドのｂトレンチにおいて比較的多くの土器片を検出したが，遺構の存在については確認できなかった。

10月９日（水）　Ａ－９～12グリッドの掘り下げ。Ａ－10グリッドより比較的多くの土器片を検出したが，遺構の存在は確認できなかった。

発掘調査風景

10月14日（月）　Ｄ－５～８グリッドの掘り下げ。各グリッドとも土器等の遺物の検出は，ほとんどなかった。

10月15日（火）　Ｃ－５～８グリッドの掘り下げ。各グリッドとも出土遺物はやはり少ないが，Ｃ－６グリッドのａトレンチにおいて打製石斧が出土した。出土層位は他の土器片と同様褐色土層中であった。

10月16日（水）　Ｂ－５～８グリッドの掘り下げ。Ｂ－８グリッドのｂトレンチにおいて比較的多くの土器片が出土したが，遺構等の確認はできなかった。

10月17日（木）　Ａ－５～８グリッドの掘り下げ。各グリッドとも遺物の出土はわずかであった。

10月18日（金）　Ｄ－１～４グリッドの掘り下げ。遺構・遺物とも確認できなかった。

10月22日（火）　Ｃ－１～４グリッドの掘り下げ。遺構・遺物とも確認できなかった。

10月23日（水）　Ｂ－１～４グリッドの掘り下げ。Ｂ－１グリッドのａトレンチにおいて比較的多くの土器片を検出したが，遺構は確認できなかった。

10月24日（木）　Ａ－１～４グリッドの掘り下げ。遺構・遺物とも確認できなかった。

10月28日（月）　Ｄ－12及びＣ－12グリッドで確認された遺構の全プランを検出するためにＣ－12・13及びＤ－12・13グリッドの４グリッド分を第１拡張区とし，排土を開始した。

10月29日（火）　引き続き第１拡張区の排土を行った。

10月30日（水）　第１拡張区の排土及び遺構プランの検出作業。Ｄ－12，Ｃ－12グリッドで検出された遺構の全体プランを出したところ，南北約５ｍ，東西約４ｍ程で，主軸がやや東に傾く長方形プランの住居跡であることを確認した。

11月５日（火）　第１拡張区の残りの遺構検出作業。住居跡の南，第１拡張区の南壁に東西に主軸をとる長さ５ｍ程の炭焼窯が確認されたため，さらに南に拡張して全プランを検出した。また，住居跡の北側で円形土坑を１基検出した。

11月６日（水）　遺構は確認できなかったが，比較的多くの土器片が出土したＡ－９・10及びＢ－９・10の４グリッド分を第２拡張区とし，遺構の有無を確認するため排土を開始した。

11月７日（木）　引き続き第２拡張区の排土を行った。

11月８日（金）　第２拡張区の排土を終了したが，遺構の検出はできなかった。

11月11日（月）　住居跡の調査を開始。覆土土層の黒褐色は炭化物や若干の焼土を含む粘性の強いものであり，土器片が比較的多く含まれていた。

発掘調査風景

11月12日（火）　住居跡の調査。中層から下層へ行くに従って遺物の量が少なくなった。

11月13日（水）　住居跡の調査。床面を検出したところかなり西壁よりに炉跡とおもわれる焼土が検出された。また，壁の検出も開始したが，南から東側の壁については比較的容易にすんだものの，北から西側にかけては不明瞭であった。特に西側は不明確であり，炉跡が西側に片寄っていることなども考え，平面プランの見直しを行うこととした。

11月14日（木）　住居跡の調査。西側の部分を中心に平面プランを見直したところ，約２ｍほど拡がることが判明した。この部分は確認面での覆土が茶褐色をおびていることから，遺構としての判断が難しいところであったが，精査した結果，他の覆土と同様な炭化物や焼土が含まれていることが決め手となった。また，炉跡についても西壁際からやや中央寄りに位置付く結果ともなった。

11月15日（金）　住居跡の調査。西側もやはり上層に遺物が多く下層は少なかった。壁もほぼ検出がすみ，床面の精査をして柱穴の検出を進めた。なお，最初に検出した炉跡と西壁の間にもう一つ炉跡が確認できたが，両者の前後関係は判断できなかった。

11月18日（月）　住居跡の調査。４本の主柱穴，棟持柱，壁沿いに並ぶ小柱穴等を検出した。壁沿いの小柱穴は主柱穴等に比較して浅く，埋土も柔い感じがした。円形土坑及び炭焼窯も併行して調査を開始した。円形土坑はほとんど遺物が出土せず，比較的浅い鍋底状のものであった。また，炭焼窯も出土遺物はなかった。

11月19日（火）　住居跡，円形土坑，炭焼窯の残った調査を完了し，写真撮影に入った。

11月20日（水）　午前中引き続き写真撮影を行った後，遺構の実測に入った。

11月21日（木）　遺構の実測の残りを完了した。

11月22日（金）～28日（木）　埋めもどし作業。併行して出土遺物の水洗い，注記等の整理作業も行った。なお，埋めもどしには人力の他に重機も使用した。

11月29日（金）　現場の後かたずけをし，発掘調査を終了した。

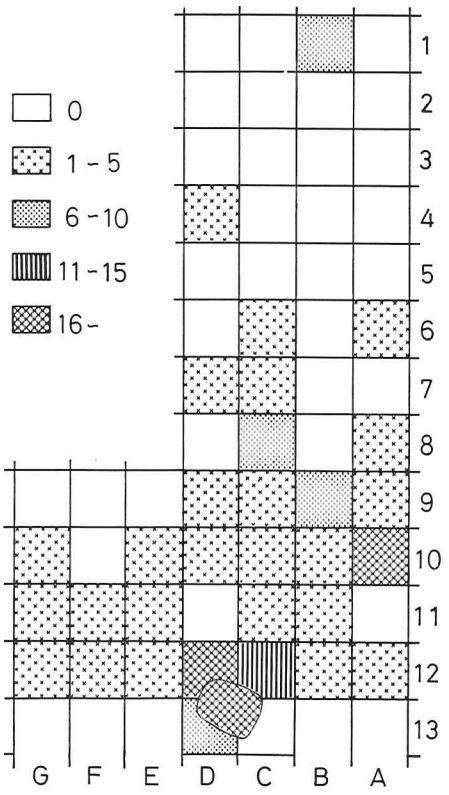
Ⅳ　検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は，住居跡１軒，円形土坑１基，炭焼窯１基（第７図）と非常に僅かであった。しかも，いずれも調査地南端部に片寄っての検出であり，今回の調査地の大部分は遺構の存在しない地域であった。遺構同様，出土遺物の量も少なく，住居跡内出土のものも含めその数は，土器片256点，石器10点，剝片数点，焼成された粘土塊１点であり，土器で器形が復元できるほどのものは認められなかった。

第６図は，各グリッドにおける土器片の出土数を図化したものである。これをみてもわかるとおり，大部分のグリッドでは，土器片の出土が無いかあっても数片ぐらいという状況である。また，平面的には，調査地の南半とりわけ住居跡の周辺に集中して出土しており，それはさらに調査地外の南東方向へ拡がる傾向を示している。つまり，本調査地は，集落の中心からはずれていることが明確である。

発掘に際しては，上欠遺跡の南に隣接した地区ということから，多数の遺構と豊富な土器，石器類の出土も予想したわけであり，その点からではやや以外な結果であった。しかし，量的には少ないながらも，内容的には以下に報告するとおり非常に貴重な資料となるものと言える。

以下，住居跡，円形土坑，炭焼窯の順に，それぞれの遺構と出土遺物の特徴を記し，さらに各遺物についての分析を行なうこととしたい。

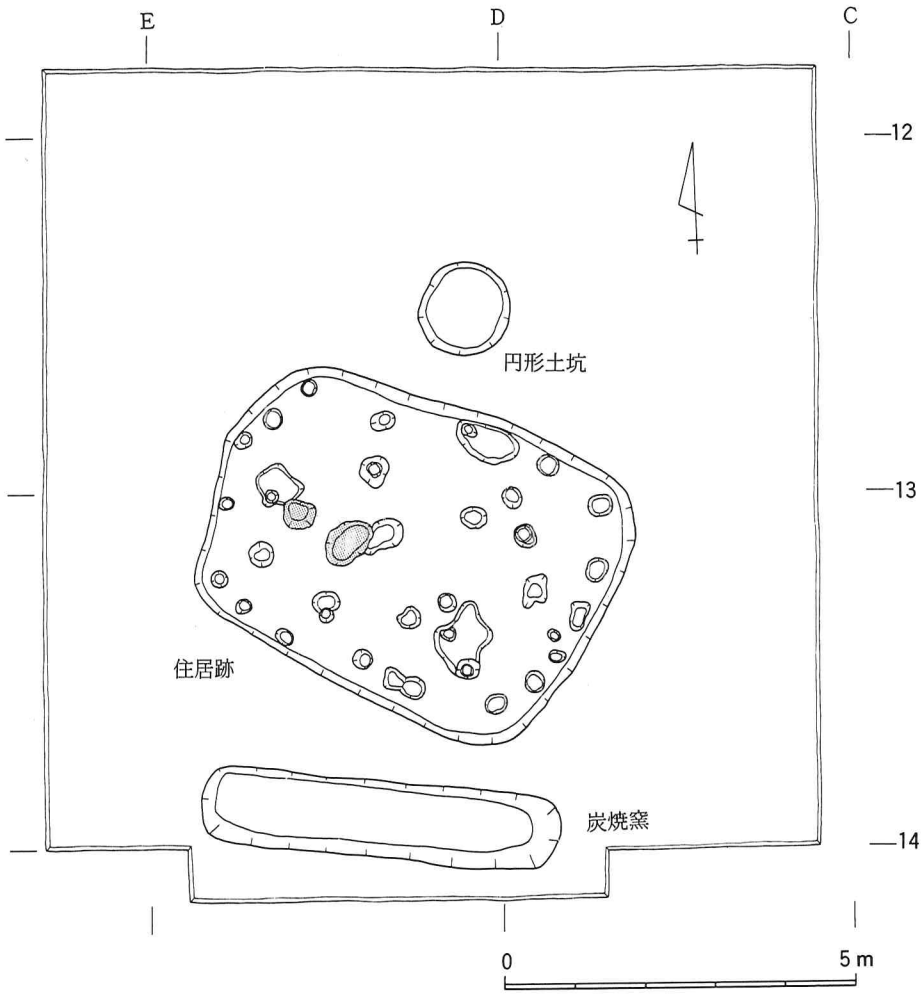


第６図　各グリッド土器片出土数（単位：個）

１　住居跡

(1)　遺構

本住居跡は調査地南端のＣ－12，Ｄ－12両グリッドにその北半分がかかり，全体の検出につながったものである。遺構の確認面は表土から第３層目の褐色土層の上面であることが住居跡中央に残した土層断面（第８図Ｂ－Ｂ′）で明らかとなっているが，この面においては住居跡の平面プランを明瞭にすることが困難であったため，調査では下の黄褐色土層上面まで掘り下げて検出にあたった。住居跡内の覆土は大きく３層に分かれ，上から炭化物や焼土を含みやや粘質な黒褐色土層（第８図Ｂ－Ｂ′の５），炭化物，焼土に加えローム粒を多く含む茶褐色土層（第８図Ｂ－



第7図　第1拡張区遺構配置図

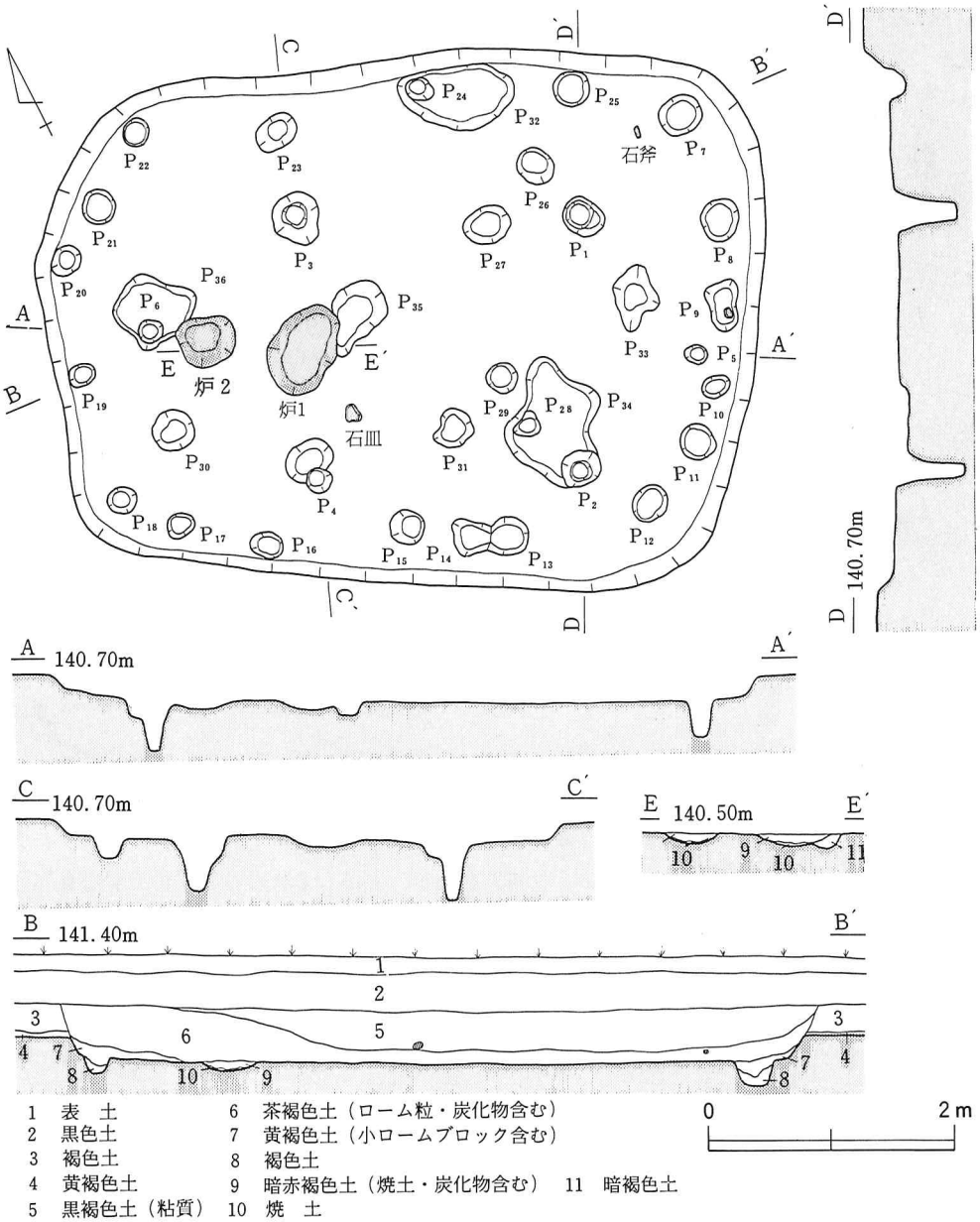
B′の6）そして小ロームブロックを含む黄褐色土層（第8図B－B′の7）である。堆積状態は，ほぼレンズ状を呈する自然堆積と判断できるが，上から2層目の茶褐色土層が全体に西側に厚く堆積しているのが特徴である。発掘日誌抄の中でも触れたが，この特徴的な覆土の堆積のために調査途中で平面プランの見直しをするという結果になっている。つまり，平面プランを明瞭にするために検出面を故意に下げたことが，同じ住居跡の覆土である黒褐色土層と茶褐色土層の境界を明瞭にしてしまい，東側の黒褐色土層の範囲のみを住居跡の平面プランと誤認することになったわけである。平面での遺構プラン確認のむずかしさを痛感した次第である。

以下，検出された遺構の特徴をまとめる。

平面形と規模　平面形は東西方向に長軸をとるほぼ隅丸の長方形であるが，西壁がやや突出気味になっていることや東壁側に比較して西壁側がやや狭まっていることなどの特徴を有している。

規模は東西方向の最大長が5.9m，南北方向が東壁寄りの広い部分で4.3m，西壁寄りの狭い部分で3.9mを測る。面積にすれば約23㎡である。なお，東西方向を主軸とすれば，W－26°－Nで北に傾いた構えである。

壁と床面　前記したように調査上検出面を下げているため，壁は実際よりも低い状態で確認している。住居跡中央に残した土層断面（第8図B－B′）から推定すれば40cm前後の高さであったものと思われる。調査によって検出した壁高は，北東部のやや高い部分で20cm，南西部の低い



1　表　土
2　黒色土
3　褐色土
4　黄褐色土
5　黒褐色土（粘質）
6　茶褐色土（ローム粒・炭化物含む）
7　黄褐色土（小ロームブロック含む）
8　褐色土
9　暗赤褐色土（焼土・炭化物含む）
10　焼　土
11　暗褐色土

第8図　住居跡実測図

番　号	口径	底径	深さ	番　号	口径	底径	深さ	番　号	口径	底径	深さ
P_1	30×35	14	48	P_{11}	28	20	20	P_{21}	27	21	15
P_2	32×28	13	54	P_{12}	27×31	17×25	25	P_{22}	22	18	18
P_3	37×42	14	43	P_{13}	30	20×25	15	P_{23}	25×35	15	17
P_4	23	13	46	P_{14}	27×35	16×25	14	P_{24}	18×24	13	20
P_5	18×65	12	30	P_{15}	27	15	13	P_{25}	30	21	14
P_6	21	12	37	P_{16}	20×25	14×17	26	P_{26}	26×30	17×20	17
P_7	32	22	20	P_{17}	21	15	14	P_{27}	30×38	19×25	16
P_8	30×35	21×25	18	P_{18}	25	14	17	P_{28}	22	14	22
P_9	20×38	15×26	20	P_{19}	17×24	13×15	12	P_{29}	26	17	18
P_{10}	17×24	12×17	22	P_{20}	25	13	12	P_{30}	35	15×20	25

第２表　１号住居跡柱穴規模一覧表（単位cm）

部分で14～15cm程度である。壁は全体に60°の傾斜をもち，大部分は床面との接点に鋭さを欠き緩やかな曲線を描いた状態で検出されている。床面はローム層の地山を７～８cm掘り込んで平坦に仕上げられたものであり，壁際に対して中央部が心もち低くなっている。これは，中央部が比較的堅く踏みしめられているのに対し壁際に近ずくにつれてやや軟弱になっていることに関係しているものと考えられる。

柱穴（第２表参照）　主柱穴は住居内部のP_1～P_6の６本である。P_1～P_4は約２mの柱間でほぼ正方形に配置されたものであり，40～50cmのしっかりとした深さをもっている。また，底径は13～14cmにほぼ一定している。これらに対し，ほぼ主軸線上でやや壁寄りに配置されたP_5とP_6は，深さが30cm，37cmとやや浅く，底径も12cmと一回り小さいものである。なお，P_5とP_6間の距離は約4.5mである。

これら６本の主柱穴以外では，壁のすぐ内側に並ぶP_7～P_{25}の18本の柱穴列が特徴的である。これらは広い部分で約１m，狭い部分で20～30cmと間隔は不統一であるが，深さが12.3cm～25.6cmと主柱穴に比べて全体に浅くなるものである。また，大きさをみると口径30cmを越えるものが目立ち，やや掘り拡げすぎた感もあるが，壁際の床面がやや軟弱であることが，住居廃絶後の柱穴壁の崩落を大きくしたことも考えられる。P_{26}～P_{30}もこれらと同様な形状を呈しているが，位置関係が不明瞭であり，一連のものとは考えにくいものである。なお，P_{31}～P_{36}の不整形な掘り込みは床面下で検出されたものである。

炉　炉は２か所検出され，いずれも西側によっている。炉１は55cm×75cmの不整楕円形で，床面を約10cm鍋底状に掘り窪めたものである。いずれも，内部には焼土・炭化物を多量に含む暗赤褐色土が埋っており，その底面は赤く焼けた焼土となっている。この２つの炉は，ほぼ同じ状況で検出されたものであるが，両者の新旧関係については不明である。なお，炉１の南約40cmの地点より，石皿（第12図５）が床に密着した状態で検出されている。炉との関係において興味深い資料と言える。

(2) 遺　物

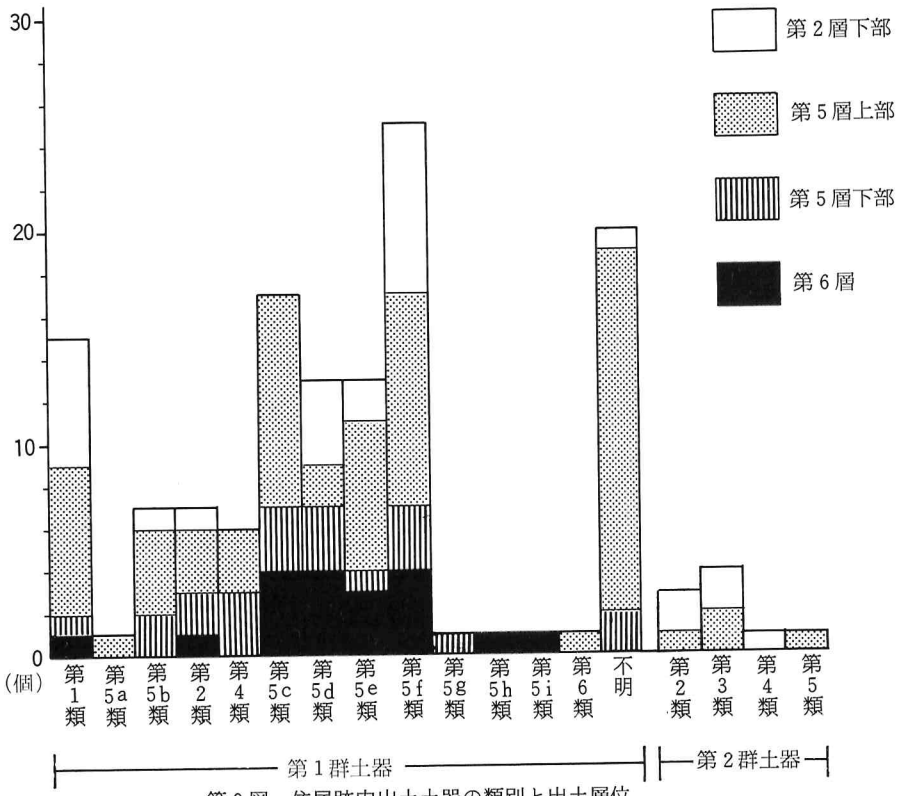
A．土　器

住居跡内からは141点の土器片が出土した。これらの出土層位と類別の関係を示したのが，第9図である。

数量的には黒浜式に比定されるものが最も多く82点出土している。また型式的に古式である花積下層式もかなり多く23点が出土している。続いて大木2a式7点，繊維を含まない前期後葉以後の土器も9点出土している。

層位的には第1次埋土と思われる6層及び5層下部に黒浜式が多く第2次埋土である2層や5層上部に花積下層式が含まれている。摩滅した小破片もこの層に多いことから，これらは，住居跡が廃絶された後の窪地へ，廃棄されたものであると考えられる。第2群土器も僅かにこの第2次埋没土中に含まれている。

住居跡内から出土したこれらの土器片の類別に関しては，各グリッド出土の土器片とともに後述することとし，ここでは個々の特徴についてのみ記すことにする。



第9図　住居跡内出土土器の類別と出土層位

各土器の説明（第1011図）　{以後，土器の縄文の記載で条数記入のないものは各段とも二本撚と考えられるものである。}

1，口縁部の破片である。口唇部は平縁でわずかに外弯しながら開く。口縁部は肥厚し帯状を呈

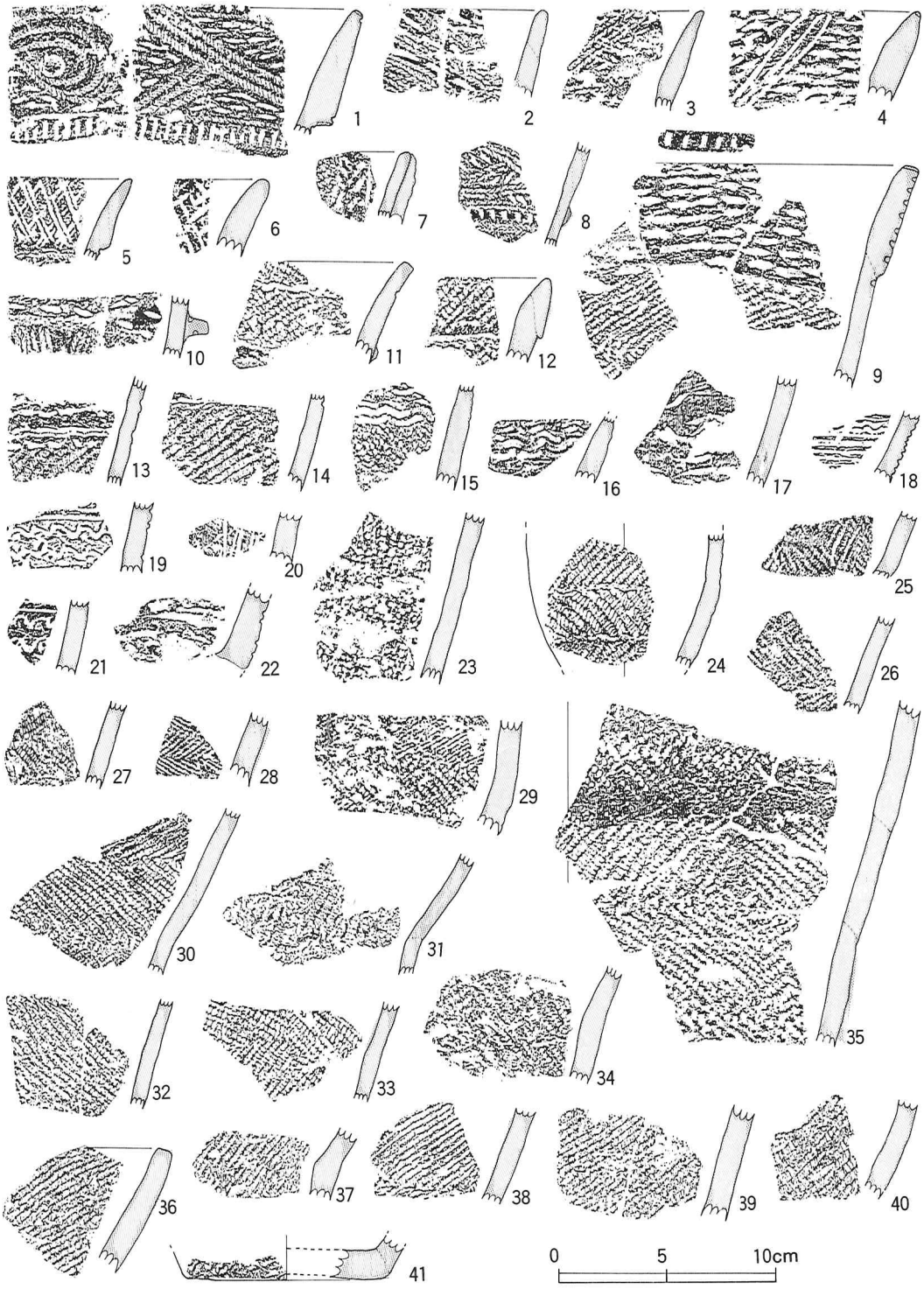
している。口唇端部には約３㎜の間隔で連続した刻み目（幅約1.5㎜）が施されている。原体は丸みをおびた棒状の道具の側縁部を押しつけたものと思われる。口縁部の下端は段をなし，連続刺突文が施されている。この原体は口唇部とおそらく同一と思われ，先端部をやや丸く加工した棒状の道具を，口縁部の肩部を押さえるようにしながら器面に対して垂直の方向に刺突したものである。刺突文の間隔は約２～３㎜。この刻み目と刺突文の内側に沿うように，それぞれ一条の撚糸圧痕文（Ｌ$\left\{\begin{matrix}r\\r\\r\end{matrix}\right.$，太さ約1.5㎜）が巡らされている。その区画内には，撚糸の圧痕にる円形文（Ｌ$\left\{\begin{matrix}r\\r\\r\end{matrix}\right.$，太さ約２㎜）や三本単位の撚糸原体圧痕文（すべてＬ$\left\{\begin{matrix}r\\r\\r\end{matrix}\right.$，太さ約２㎜）によって蕨手状文・幾何学文が施されている。撚糸文充塡後の間隙には，右方から左方へ刺した連続刺突文が施されている。原体は前述の棒状の工具と思われる。器面はこれらの文様を施文した後なで調整されている。口縁部の段下には一条の撚糸圧痕文が巡らされている（Ｒ$\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\\\ell\end{matrix}\right.$，太さ約２㎜）。色調は外面淡褐色・内面赤褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には口唇部上方は横方向，下方は縦方向の研磨が見られる。第５層上部出土。

２，口縁部の破片である。口唇部は平縁で端部がやや細くつぼまる。右下がりの三本単位の撚糸圧痕文（Ｒ$\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\\\ell\end{matrix}\right.$．Ｌ$\left\{\begin{matrix}r\\r\\r\end{matrix}\right.$．Ｒ$\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\\\ell\end{matrix}\right.$，各太さ約1.5㎜）が僅かの間隙をおいて施されている。あるいは絡条体の回転によるものか。間隙には，右斜め下方から左斜め上方へ刺した連続刺突文が列をなして施されている。原体は１同様の棒状の工具と思われる（太さ約1.7㎜）。器面はやはりこれらの文様を施文した後に，なで調整されている。色調は外面淡褐色内面暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には横方向の研磨が見られる。第５層下部出土。

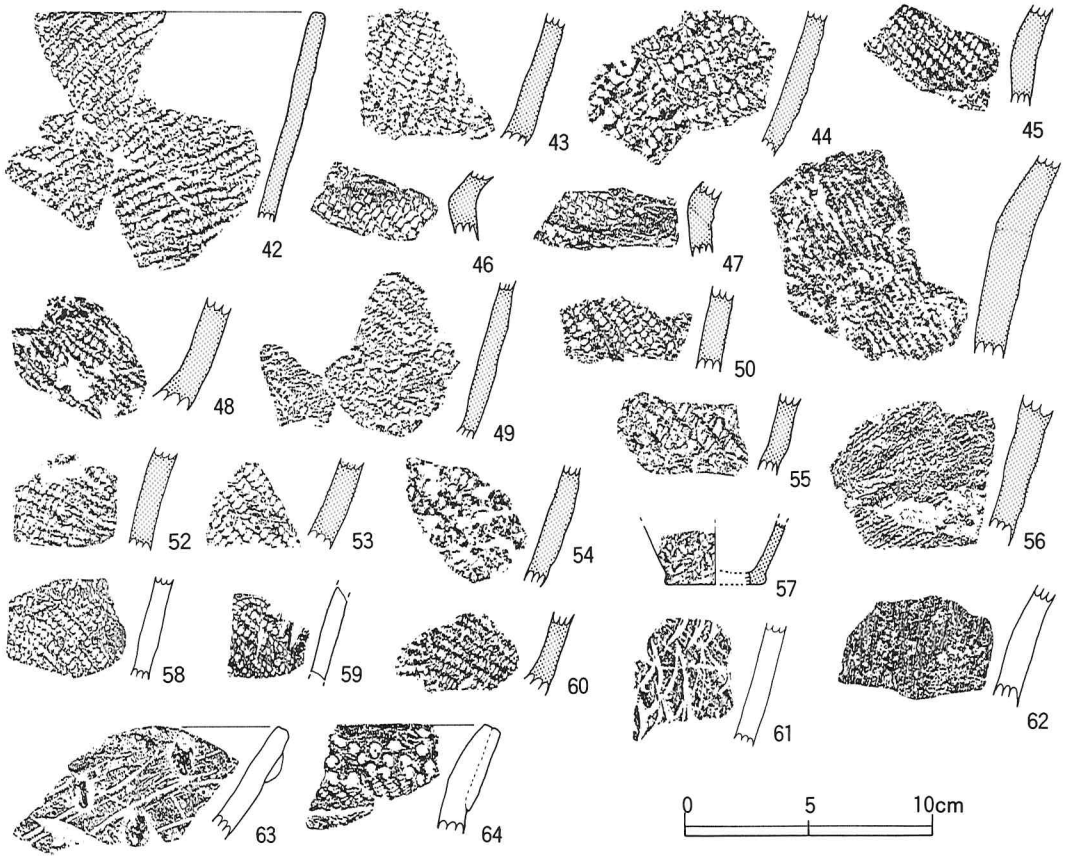
３，口縁部の破片である。口唇部は平縁でやや外弯しながら開く。端部は先にいくに従って細くつぼまる。口唇部には６㎜前後の間隔で刻み目が施されている。原体は幅１㎜程で端部がやや鋭利なものである。文様は右上がりの斜位に撚糸圧痕文（Ｌｒ．Ｒℓ各太さ約１㎜）が連続して施されている。またその間隙には，右斜め上方から左斜め下方へ刺した連続刺突文が列をなして施されている。原体は１同様の棒状の工具と思われる（太さ約1.2㎜）。器面はこれらの文様が施文された後に，なで調整されている。色調は外面淡褐色内面暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面は横方向の研磨が施されている。第５層上部出土。

４，口縁部の破片である。口唇部は平縁で，わずかに外弯しながら開く。口縁部は肥厚し帯状を呈すものと思われる。口唇端部には約10～15㎜の間隔で連続した刻み目（幅約2.5㎜）が施されている（深さ約1.5㎜）。原体は１同様断面が丸みをおびた棒状の道具の背部を押しつけたものと思われる。文様は三本の右上がりの撚糸原体圧痕文（すべてℓ太さ約1.5㎜）が施されている。それ以外の間隙には，右方から左方へ刺した連続刺突文が充塡されている。原体は前述同様の棒状のものと思われるが１，２に比べやや端部が尖っている（太さ約1.5㎜）。器面はこれらの文様を施文した後やはりなで調整されている。色調は外面暗褐色・内面黒褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面にはていねいな横方向の研磨が施されている。第５層上部出土。

５，口縁部の破片である。口唇部は平縁でわずかに外弯しながら開く。口縁部は下方が肥厚し帯



第10図　住居跡出土土器拓影１



第11図　住居跡出土土器拓影 2

状を呈している。口縁部には半截竹管（幅約3.0㎜）による平行沈線によって格子状文が施されている。半截竹管文はまず右上がりを連続して施した後，右下がりを施している。口縁部の段下には一条の撚糸圧痕文が巡らされている（L$\left\{\begin{matrix}r\\r\\r\end{matrix}\right.$，太さ約２㎜）。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には繊維が含まれている。また胎土の石英粒の多さが目につく。全体に磨耗している。第２層下部出土。

６，口縁部の破片である。口唇部は平縁で，わずかに外弯しながら開く。口縁部下方は破損しているがおそらく肥厚していたとおもわれる。棒状の工具（太さ約1.6～２㎜）によって器面を押さえながら格子状文が施されている。まず右下がりを連続して施したあと右上がりを施している。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面にはていねいな横方向の研磨が施されている。第２層下部出土。

７，小破片である。口縁部は小波状を呈し，口唇部は直線的に開く。波頂下に幅約８㎜，高さ約６㎜前後の隆帯が垂下する。隆帯上には先のやや丸みをおびた棒状の工具（太さ約1.5㎜）による刺突文が施されている。隆帯の両側には単節ＲＬの斜縄文が縦位に施されている。色調は内外面

ともに暗褐色を呈し，胎土には繊維が含まれている。第２層下部出土。

８，口縁部の破片である。口唇部を欠く。二本一単位の撚糸圧痕文（R$\begin{cases}\ell\\ \ell\\ \ell\end{cases}$．L$\begin{cases}r\\ r\\ r\end{cases}$，太さ約1.2～1.5㎜）が斜位や横位に施されている。その間隙には細い半截竹管（太さ約1.7㎜）による刺突文が連続して施されている。頸部には，一条の細い隆帯が巡らされている。隆帯上には，幅約３㎜の間隙で細い半截竹管による刺突文が縦位に連続して施されている。この原体は口縁部の刺突文と同一である。隆帯の下位にはやはり二本一単位の撚糸圧痕文（太さ約1.2～1.5㎜）が一組横位に施されている。器面はこれらの文様が施文された後，なで調整されている。色調は内外面ともに黒褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれているまた石英粒も顕著である。内面は横方向の研磨が見られる。第５層上部出土。

９，口縁部の破片である。口唇部は平縁でわずかに外弯しながら開く。口縁部は肥厚し帯状を呈している。口唇端部には約４～５㎜の間隔で連続した刻み目（幅約2.5㎜）が施されている。原体は丸みをおびた棒状の道具の側縁部を押しつけたものと思われる。肥厚させた口縁部の下端は段をなしている。口縁部には右方から左方へ刺した連続刺突文が充填されている。原体は端部をやや尖らせた棒状のものと思われる（太さ約2.5㎜）。またこれらの文様を施文した後やはりなで調整されている。胴部には無節Ｌｒの横位の斜縄文が施されている（施文幅約４㎝）。またその下部には単節ＬＲの斜縄文が施されている。色調は外面赤褐色，内面黒褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には細かな繊維状の原体によるなでが施された後，横方向の研磨が施されている。第５層上部出土。

10，口縁部の破片である。口唇部を欠く。頸部に幅約６㎜高さ約10㎜で断面が四角形を呈す隆帯が横位に施されている。この隆帯は右方端部は切れている。隆帯上には端部をやや尖らせた棒状のものと思われる原体（太さ約2.5㎜）を左方から右方へ刺突した連続刺突文が施されている。隆帯下には三本単位の撚糸圧痕文（R$\begin{cases}\ell\\ \ell\\ \ell\end{cases}$．L$\begin{cases}r\\ r\\ r\end{cases}$．R$\begin{cases}\ell\\ \ell\\ \ell\end{cases}$，各太さ約1.5㎜）が縦位に施されている。おそらく絡条体の回転によるもので，木目状を呈すものか。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には縦位の研磨が施されている。

11，口縁部の破片である。口唇部は平縁でわずかに外弯しながら開く。口唇部は，なでによって面とりされている。頸部には断面が台形状を呈す細い隆帯が巡らされている。口縁部には単節ＲＬ（施文幅約1.2㎝）と単節ＬＲの斜縄文（施文幅約2.0㎝）が横位に二段施され，羽状縄文を呈している。またＲℓの縄（幅約２㎜）をＬ巻に縛った所謂他条結縛痕が認められる。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には横位の研磨が施されている。第２層下部出土。

12，口縁部の破片である。口唇部は平縁で，外弯しながら開く。口縁部は肥厚し帯状を呈している。肥厚した部分には単節ＬＲ（施文幅約2.0㎝），ＲＬの斜縄文が横位に施され羽状縄文を呈している。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には横位の研磨が施されている。全体に磨耗している。第５層上部出土。

13，口縁部の破片である。口唇部を欠く。口縁部はなで調整され，横位の小波状文が二組うかがえる。原体は半截竹管（幅約３㎜）及び棒状の工具（太さ約1.5㎜）によるものが一単位と思われる。胴部には無節Ｌｒの斜縄文が横位に施されている。色調は外面暗褐色・内面黒褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び細かな石英粒が含まれている。内面には横位の研磨が施されている。第２層下部出土。

14，口縁部の破片である。僅かに小波状文がうかがえる。原体は棒状の工具（太さ約2.0㎜）によるものである。胴部には横位の無節Ｌｒの縄文が施されている。色調は内外面ともに黒褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び細かな石英粒が含まれている。内面には横位の研磨が施されている。第５層下部出土。

15，口縁部の破片である。口唇部を欠く。口縁部はなで調整され，横位の小波状文が二組うかがえる。原体は棒状の工具（太さ約1.5～２㎜）によるものと思われる。一単位は三本であると思われる。胴部には横位の単節ＲＬの縄文が施されている。色調は外面淡褐色・内面黒褐色を呈し，胎土には多量の繊維及びやや粒の大きい石英粒が含まれている。内面には横位の研磨が施されている。第５層上部出土。

16，口縁部の破片である。口唇部を欠くが，口縁部は平縁で直線的に開く。横位の連続した小波状文が施されている。原体はやはり棒状の工具（太さ約1.5～２㎜）によるものと思われる。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には繊維が含まれている。内面には横位の研磨が施されている。第５層下部出土。

17，胴部の破片である。まばらな横位のＳ字状沈文（幅約２㎜）が施されている。絡条体によるものと考えられる。色調は外面赤褐色・内面黒褐色を呈し，胎土には繊維が含まれている。内面は研磨が施されている。第５層上部出土。

18，頸部の破片である。半截竹管文による平行沈線文（幅約４㎜）が重畳して施されるなかに，同一の原体を用いた小波状文が施されている。色調は内外面ともに黒褐色を呈し，胎土には繊維が含まれている。内面は丁寧に研磨が施されている。第５層下部出土。

19，頸部の破片である。半截竹管文による二組の平行沈線文（原体幅約4.5㎜）間に，同一原体によってコンパス文が二組施されている。色調は内外面ともに黒褐色を呈し，胎土には繊維及び細かな石英粒が多く含まれている。内面には丁寧な研磨が施されている。第５層下部出土。

20，頸部の破片である。半截竹管文による平行沈線文（原体幅約５㎜）間に，同一原体によってコンパス文が二組施されている。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には繊維及び細かな石英粒が多く含まれている。内面には丁寧な研磨が施されている。第５層上部出土。

21，胴部の破片である。半截竹管による平行沈線文（幅約３㎜）が縦位にまばらに施されている。色調は外面黒褐色内面赤褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。第５層上部出土。

22，底部に近い胴部の破片である。横位の平行沈線文（幅約５㎜）が二組みられる。色調は外面赤褐色・内面暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面はなで調整されている。

第５層上部出土。

23，胴部の破片である。アナダラ属の貝の腹縁を器面に押しつけた刺突文が施されている。色調は外面赤褐色・内面暗赤褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。全体に激しく磨耗している。第５層上部出土。

24，胴部の破片である。０段３条の単節ＬＲ（施文幅約2.5cm）と同ＲＬ（施文幅約2.2cm）の横位の斜縄文が交互に施され羽状縄文を呈している。それぞれに他条結縛がみられる。上の結縛痕はＲＬ原体の方で殆ど撚りの解けそうなＬｒの縄で結び目はＬ巻に結縛している。下の結縛痕はＬＲ原体の方でやはり殆ど撚りの解けそうなＲℓの縄で結び目はＬ巻に結縛している。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。第５層上部出土。

25，胴部下半の破片である。０段３条の単節ＲＬ（施文幅約1.4cm）の縄文が横位及び斜位に施され羽状縄文を呈している。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。第５層上部出土。

26，胴部の破片である。０段３条の単節ＬＲと同ＲＬ（施文幅約2.2cm）の横位の斜縄文が交互に施され羽状縄文を呈している。ＲＬの原体に他条結縛がみられる。殆ど撚りの解けそうなＲℓの縄で結び目はＬ巻に結縛している。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維と，やや多めの石英粒が含まれている。第５層下部出土。

27，胴部の破片である。０段３条と思われる単節ＬＲと同ＲＬ（施文幅約1.8cm）の横位の斜縄文が交互に施され羽状縄文を呈している。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維と，多めの石英粒が含まれている。第２層下部出土。

28，胴部の破片である。無節のＲℓと同Ｌｒ（施文幅約1.3cm）の横位の斜縄文が交互に施され羽状縄文を呈している。色調は外面赤褐色・内面暗褐色を呈し，胎土には繊維が含まれている。第５層下部出土。

29，胴部下半の破片である。無節のＬｒと単節ＲＬの横位の斜縄文が交互に施され羽状縄文を呈している。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。器面は内外ともに痛んでいる。内面には研磨が施されている。第５層上部出土。

30，頸部の破片である。頸部は緩やかに外反し内弯ぎみに開く。単節ＬＲと単節ＲＬ（幅約4.2cm）の横位の斜縄文が交互に施され羽状縄文を呈している。ＲＬの原体に他条結縛がみられる。太さ0.5mm程度の細いｒの縄数本で，結び目はＲ巻に結縛している。色調は外面暗褐色・内面淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には粗い縦方向の研磨が施されている。第５層上部出土。

31，頸部である。頸部は緩やかに外反し内弯ぎみに開く。無節Ｌｒの斜縄文が横位に施されている。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。屈曲部から上の内面には粗い縦方向の研磨が施されている。屈曲部には草の茎状の側面部によるなで調整が施されている。第５層上部出土。

32，胴部の破片である。おそらく30と同一個体と思われる。単節ＲＬ（幅約4.2cm）の横位の斜縄文が施されている。原体の端部は結縛が解けた圧痕となっている。色調は外面暗褐色内面淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には粗い縦方向の研磨が施されている。第５層上部出土。

33，胴部の破片である。単節の$R\begin{cases}L\begin{pmatrix}r\\r\end{pmatrix}\\L\begin{pmatrix}r\\r\\r\end{pmatrix}\end{cases}$とＬＲの斜縄文が横位に施され羽状縄文を呈している。また下方のＬＲが施される同一帯には向かって右側に条の異なる単節ＲＬの横位の斜縄文が施されている。色調は内外面ともに黒褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び細かな石英粒が含まれている。内面には粗い研磨が施されている。第５層上部出土。

34，胴部の破片である。単節の斜縄文が横位に２段確認できる。上の段には同一帯にＬＲとＲＬの斜縄文が横位に施されている。下の方にはＲＬの斜縄文が横位に施され部分的に羽状縄文を呈している。色調は外面暗褐色・内面黒褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び細かな石英粒が含まれている。内面には粗い研磨が施されている。第６層出土。

35，胴部の破片である。単節の斜縄文が横位に６段確認できる。最上段部は僅かにその痕跡がうかがえる。単節ＲＬの斜縄文で末端は太さ0.5mm程度の細いｒの縄数本で結縛されている。次段は単節ＲＬ（施文幅約3.5cm）の斜縄文が横位に施されている。三段目は同一帯に横位の単節ＬＲ（施文幅約4.2cm）とＲＬ（施文幅約4.5cm）の斜縄文が施されている。四段目は同一帯に横位の単節ＲＬ（施文巾約4.5cm）とＬＲの斜縄文が施されている。この結果三・四段めで条が四角を囲んでいるようにみえる。五・六段目には撚りの異なった単節ＬＲとＲＬの原体を結束させ（結束第１種）横位に回転させた羽状縄文が施されているが，五段目に関しては四段目に消されて不明である。色調は外面暗褐色で下半部が赤褐色を呈し，内面は暗褐色と黒褐色を呈す。内面下部にはタール状の炭化物が付着している。胎土には多量の繊維及び細かな石英粒が含まれている。内面には粗い研磨が施されている。第５層上部出土。

36，口縁部の破片である。口縁部は波状を呈し，口唇部はやや内弯ぎみに開く。口唇端部は研磨され面とりがなされている。器面には口縁部から無節Ｌｒの横位の斜縄文が２段まで確認できる（施文幅約3.2cm）。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には繊維及び細かな石英粒が含まれている。内面には横方向のていねいな研磨が施されている。第６層出土。

37，頸部である。頸部は緩やかに外反し内弯ぎみに開く。無節Ｌｒの斜縄文が横位に施されている。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には繊維及び細かな石英粒が含まれている。内面には横方向のていねいな研磨が施されている。おそらく36と同一個体である。第５層上部出土。

38，胴部の破片である。無節Ｌｒの横位の斜縄文が２段まで確認できる。色調は内外面ともに黒褐色を呈し，胎土には繊維及び細かな石英粒が含まれている。内面には横方向の粗い研磨が施されている。第５層下部出土。

39，胴部の破片である。無節Ｌｒの横位の斜縄文が２段まで確認できる。色調は内外面ともに黒色を呈し，胎土には繊維及び細かな石英粒が含まれている。内面には横方向の粗い研磨が施され

ている。第２層下部出土。

40，胴部の破片である。無節Ｌｒの横位の斜縄文が２段まで確認できる。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には繊維及び細かな石英粒が含まれている。内面には横方向の粗い研磨が施されている。外面にはスス状の炭化物が付着している。第６層出土。

41，底部の破片である。無節Ｌｒの横位の斜縄文が施されている。色調は内面ともに黒褐色外面淡褐色を呈し，胎土には繊維及び細かな石英粒が含まれている。内外面ともに粗い研磨が施されている。底部はやや上げ底を呈している。第２層下部出土。

42，平縁を呈する口縁部片である。口唇部は直線的に開く。口唇端部は研磨されやや面とりがなされている。器面には口縁部から単節ＬＲの横位の斜縄文が４段まで確認できる（施文幅約3.5㎝）。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には口唇部内面のみていねいな横方向の研磨，以下は縦方向のていねいな研磨が施されている。なお外面にはスス状の炭化物が付着している。第５層上部出土。

43，胴部の破片である。単節ＬＲの横位の斜縄文が２段まで確認できる。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面はなで調整されている。第６層出土。

44，胴部の破片である。節の太い単節ＬＲの横位の斜縄文（施文幅約3.5㎝）が３段まで確認できる。色調は外面赤褐色・内面暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び細かな砂粒が多く含まれている。内面には炭化物が付着している。第６層出土。

45，頸部の破片である。単節ＲＬの横位の斜縄文が２段確認できる。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。外面には炭化物が付着している。第２層下部出土。

46，頸部の破片である。単節ＲＬの横位の斜縄文が施されている。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。外面にはやはり炭化物が付着している。第２層下部出土。

47，頸部の破片である。単節ＲＬの横位の斜縄文が２段確認できる。色調は外面黒褐色・内面淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。第５層上部出土。

48，底部に近い胴部の破片である。単節ＲＬの横位の斜縄文が施されている。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には粗い研磨が施されている。第５層上部出土。

49，胴部の破片である。単節ＲＬの横位の斜縄文が２段確認できる。色調は外面淡褐色・内面黒色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には粗い研磨が施されている。第２層下部出土。

50，胴部の破片である。単節ＲＬの横位の斜縄文が施されている。色調は外面赤褐色・内面暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内外面ともに摩滅している。第５層上部出土。

51，頸部の破片である。単節ＲＬの横位の斜縄文が４段確認できる（原体幅約2.5㎝）。色調は内外面ともに淡褐色を呈す。胎土には繊維が含まれている。内外面ともに摩滅している。第５層上

部出土。

52，胴部の破片である。単節ＲＬの横位の斜縄文が２段確認できる。色調は外面黒褐色・内面淡色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。第５層上部出土。

53，胴部の破片である。単節ＲＬの横位の斜縄文が２段確認できる。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。第５層上部出土。

54，胴部の破片である。節の太い単節ＲＬの横位の斜縄文が施されている。色調は外面黒褐色・内面淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。外面にはタール状の炭化物が多量に付着している。住居跡内Pit出土。

55，胴部の破片である。無節のＲℓの横位の斜縄文が施されている。０段の繊維の太さがまちまちで一見単節のように見える。色調は外面赤褐色・内面淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び細かな砂粒が多く含まれている。内面はなで調整されている。第５層下部出土。

56，胴部の破片である。絡条体による撚糸圧痕文が施されている。器面についた擦痕から原体は０段ｒの縄を軸としそれにＲℓの撚糸をＬ巻にしたものと思われる。第６層出土。

57，底部の破片である。$L\begin{cases}R\begin{pmatrix}\ell\\ r\end{pmatrix}\\ L\begin{pmatrix}\ell\\ r\end{pmatrix}\end{cases}$の異条縄文が横位に施されている。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面及び底部には研磨が施されている。第６層出土。

58，胴部の破片である。Ｒ巻の結節（Ｌｒ）付きの単節ＲＬの縄文が横位に施されている。色調は外面赤褐色・内面淡褐色を呈する。胎土に繊維は含まれず，細かな砂粒が多く含まれている。第２層下部出土。

59，胴部の破片である。やはりＲ巻の結節（Ｌｒ）付きの単節ＲＬの縄文が横位に施されている。色調は外面赤褐色・内面淡褐色を呈する。胎土に繊維は含まれず，細かな砂粒が多く含まれている。第５層上部出土。

60，胴部の破片である。単節ＲＬの縄文が横位に施されている。色調は外面暗褐色・内面黒褐色を呈する。胎土に繊維は含まれず，細かな砂粒が多く含まれている。内面にはタール状の炭化物が付着している。第５層上部出土。

61，胴部の破片である。削り調整された器面に平縁の貝殻の腹縁で，波状文が施されている。色調は内外面ともに淡赤褐色を呈している。胎土に繊維は含まれず，細かな砂粒が多く含まれている。第２層下部出土。

62，胴部の破片である。無文であり外面には縦方向の幅の広い研磨が施されている。色調は内外面ともに淡赤褐色を呈している。胎土に繊維は含まれず，細かな砂粒が多く含まれている。内面はなで調整されている。第５層上部出土。

63，波状を呈す口縁部の破片である。口唇端部は研磨され面とりされている。なで調整された器面にはまず半截竹管（原体幅約４㎜）による斜位の平行沈線文が施され，その後に粘土粒の縦長の瘤が貼付されている。色調は内外面ともに淡褐色を呈している。胎土に繊維は含まれず，細かな砂粒が多く含まれている。内面はなで調整されている。第２層下部出土。

64，平縁な口縁部の破片である。口唇端部は研磨され面とりがなされている。口縁部は帯状に肥厚し縄文原体の閉端部による刺突文が施されている。その下には単節ＲＬの縄文が横位に施されている。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土に繊維は含まれていないが，細かな砂粒が多く含まれている。内面にはていねいな横方向の研磨が施されている。第５層上部出土。

B　石　器

石器は，石鏃１点・同未製品１点・磨製石斧１点・石皿１点・擦痕が認められる円礫１点の計５点が出土した。

第12図１は凹基の石鏃である。周縁部は丁寧な剝離が施され整形されている。先端部を欠損しており，残存長2.3cm，幅1.6cm，厚さ0.5cm，重量0.95ｇを計る。石質は石英類。第５層上部出土。

２は石鏃の未製品と思われるもので，２面に丁寧な剝離が認められる。残存長2.6cm，幅2.0cm，厚さ0.7cm，重量2.81ｇを計る。石質はチャート。第５層上部出土。

４は磨製石斧である。刃部を破損している。断面は楕円形で乳棒状を呈している。基部ちかくに自然面を残すが，全体によく研磨されている。残存長18.3cm，幅5.4cm，厚さ3.4cm，重量407.7ｇを計る。石質は緑色岩類。第５層下部出土。

５は石皿と思われるものである。表面が，全体に２箇所わずかに凹んでいる。その部分は撫でると滑らかであり明かに使用痕と思われる。図上右方及び下方が欠損しており，残存長12.8cm，幅14.5cm，厚さ3.9cm，重量1071.6ｇを計る。石質は安山岩。住居跡内床面出土。

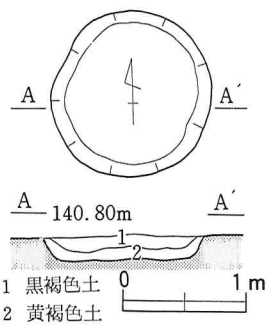
10は表面に多く擦痕が認められる円礫である。表面及び側面に細い線状・爪形・楔形の傷が集まってあたかも鼠歯の嚙みあと状になっている。傷の長さは２～20mm，巾は広くて１mm，深さは深くて0.5mm程度である。長さ7.6cm，幅8.2cm，厚さ2.4cm，重量178.7ｇを計る。石質は安山岩。第６層出土。

石器以外にも，石核及び剝片が６点出土している。

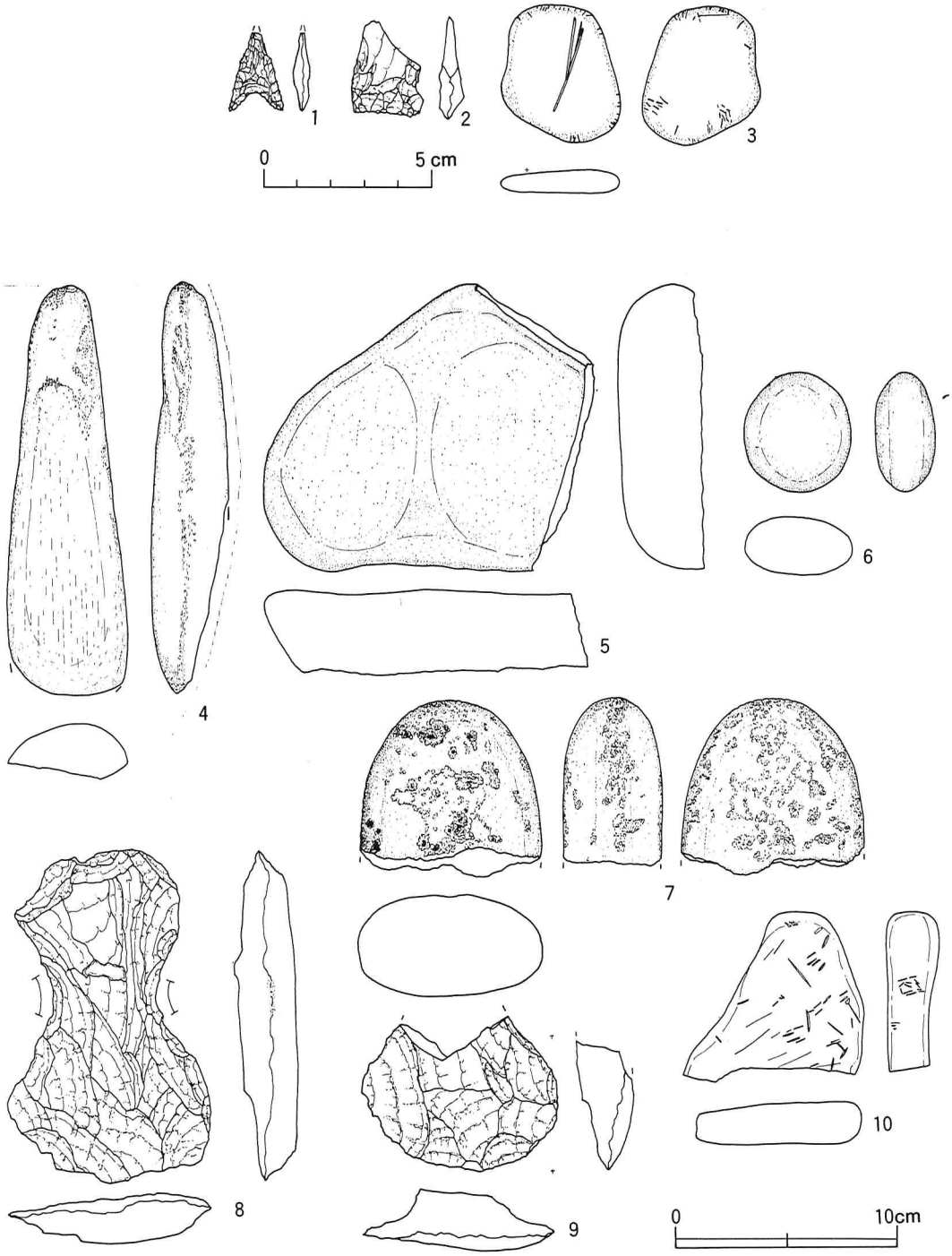
石核は小形で，チャート製である。剝片はチャート３点，石英類１点，黒曜石１点である。他に安山岩の卵大から拳大のものが20点ほど出土している。これらは炉跡に廃棄された状態で出土している他は，覆土中に投げ込まれた状態で出土している。

２　円形土坑

住居跡の北，約２ｍの地点から検出されたものである。検出面は住居跡とほぼ同じ黄褐色土層の上面である。やはり，その上層の褐色土層中で確認できたものであるが，平面プランを明瞭にするため検出面



第13図　円形土坑実測図



第12図　上欠南遺跡出土石器実測図

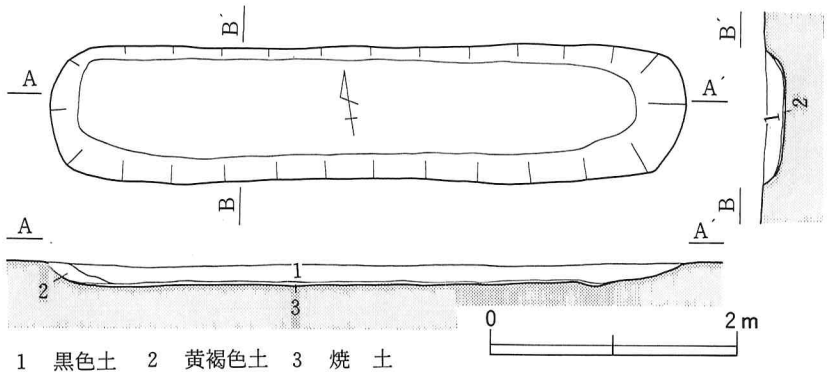
を下げたものである。覆土は黒褐色土と黄褐色土の上下２層に分かれるが，いずれもしまりのあるやや粘質な土層である。

平面形はほぼ正円に近く，東西径で1.28m，南東径で1.32mである。検出面からの深さは20cmである。壁は80°前後の傾斜をもって立ち上がっており，ほぼ平坦にされた底面に緩やかに移行している。なお，出土遺物はまったくみられない。

3　炭焼窯

住居跡のすぐ前，調査地の最南端から検出されたものである。発掘前から僅かな土地の窪みが確認できていたものである。調査地外の現在山林となっているところにも，同じようなものが確認できることから，本地域周辺で継続的に炭焼きが行なわれていたものとみられる。恐らくは，近年の所産と考えられる。

検出された遺構は，全長5.12m，幅1.05mの細長い形状のものであり，長軸はほぼ東西を向いている。深さは，検出面からは10～15cmであるが，表土からでは７～80cmあったものとみられる。底面は船底形に近いものであり，ほぼ全面に焼土が検出されている。



1　黒色土　2　黄褐色土　3　焼　土

第14図　炭焼窯実測図

4　各グリッド出土の遺物

(1)　土　器

各グリッドからは縄文時代の土器片109点，弥生時代中期と思われる破片１点，土師器片２点，内耳土器片３点の計115点の土器片が出土した（第15図）。ここでは，それらの各土器群の分布について各時期ごとに順を追って記すことにする（第16～19図）。

今回の調査で最も時期的に遡れるのは，前期初頭の花積下層式に比定できるものである。これらはA－10グリッド及び住居跡周辺に集中して出土し，住居跡の覆土中からも量的に多く確認されている（第16図）。

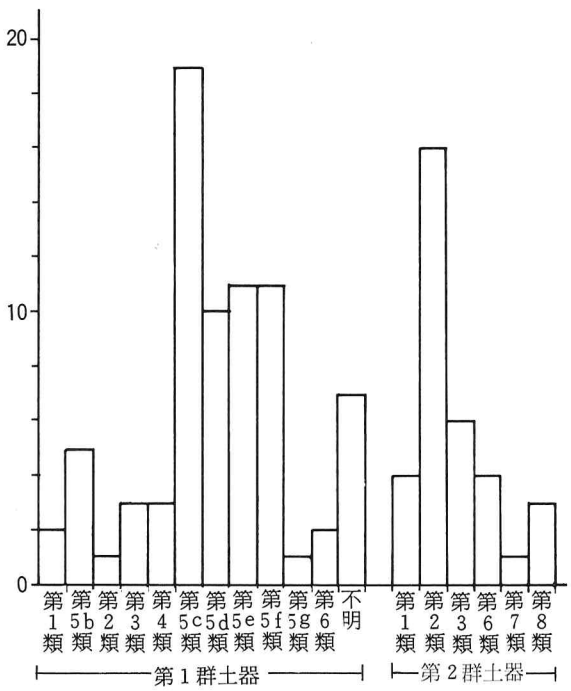
次に東北地方の大木２ａ式に比定できるものは，花積下層式に比べより散布が狭く，住居跡付

近のみで出土している（同図）。

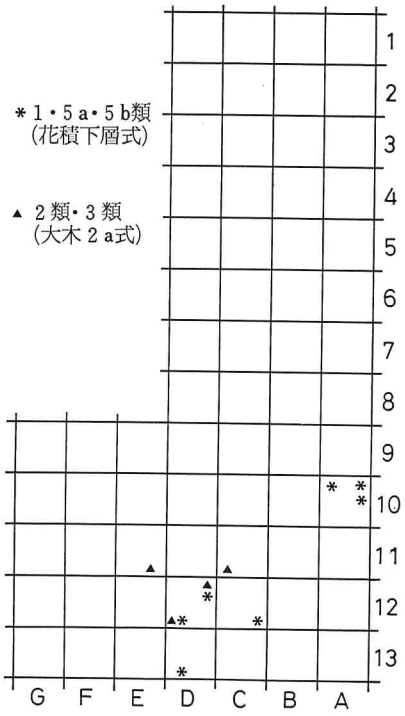
最も多く出土した黒浜式のものは発掘区北端のＢ－１グリッドで若干出土し，その南側で散布が一旦途切れ，７グリッドより南側でまた出土している。特にＡ・Ｂ－10グリッド，Ｃ－12グリッド，Ｄ－13グリッドでの出土が顕著である。また住居跡より西側の台地奥部にも若干の出土がみられる（第17図）。

第２群土器では，諸磯ａ式と思われるものは４区から12区にかけて散在し，調査区の中ほどの北西部から南東部にかけて散在していた。ただ黒浜式の集中する区での出土はあまり密ではない。浮島式はＤ－７グリッドからＡ－12グリッドにかけて帯状にまとまって出土している。中期及び後期の破片は住居跡の北側にわずかに散布している（第18図）。

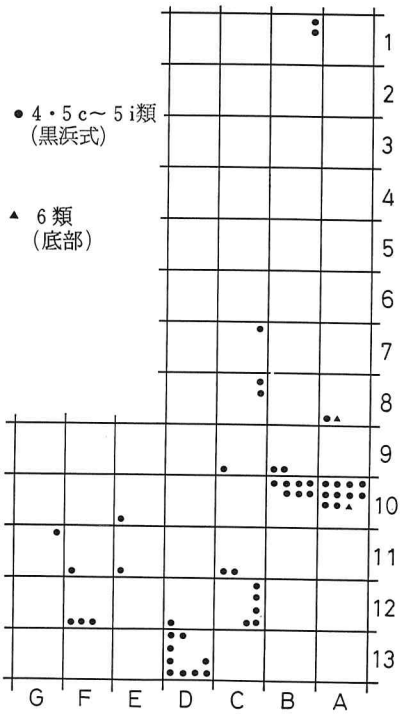
これらを総合して考えると，前期の各時期の土器片は，ある程度のまとまりを有して散布していたことがうかがえる。また，土器片が調査区の東南部に集中する傾向が認められること，及び住居跡の発見位置を考慮するなら，遺跡は今回の調査区のさらに東南部，すなわち台地の縁辺部へのびている可能性がある。第19図は各期の土器片の接合資料及び同一個体の分布を示したものである。土器片の中には約30ｍ離れた５地点に別れて出土していたものもある。また住居跡及び周辺グリッド間でも10ｍをこえた距離で同一個体片が出土し，しかも住居跡の帰属する時期とは明かに異なった花積下層式や浮島式の破片の同一個体資料も含まれている。これらは覆土中のものであり，いわゆる「流れ込み」によるものであろうか。



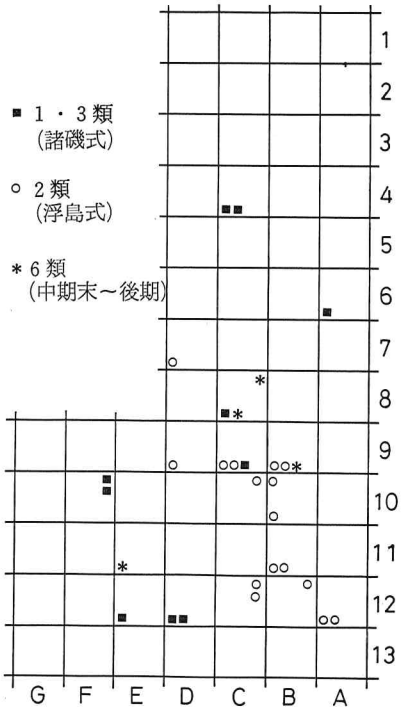
第15図　各グリッド出土土器の類別（単位：個）



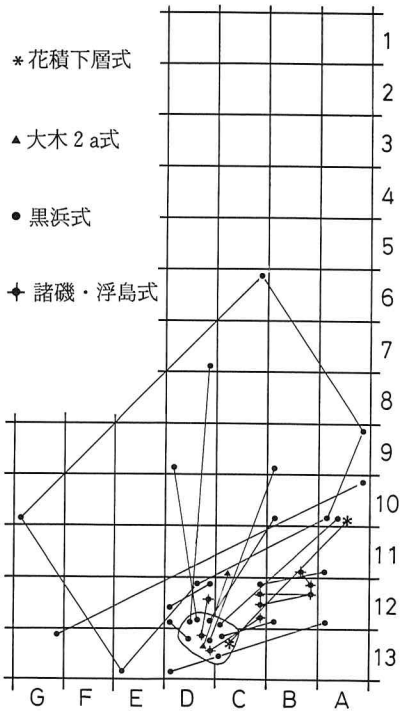
第16図　第1群1・5a・5b類及び
2・3類土器分布図



第17図　第1群4・5c～5i・6類土器分布図



第18図　第2群土器分布図



第19図　土器片の接合・同一個体の分布関係図

同一個体の別離散布の要因について考えた場合，前述した距離をおいて数地点に分散して出土するような例は，一個の破片が長い年月の間に自然の営力で破壊分散したと考えるには，あまりにも動きすぎていると思われ何らかの人為性をそこにもとめたい。しかし人為的な要因以外にも，土壌中の小動物や，季節によっては豪雨などの（ただしこの場合，地面にあまり草などが繁茂していないことが自然に移動する条件になるだろうが・・・），自然的要因も当然考えなければならない。しかし，どの移動がどの要因によるものかは全く不明としか言いようがない。

次に，これら各グリッド出土の土器片のうち，図示し得たものについてその特徴を記すことにする。

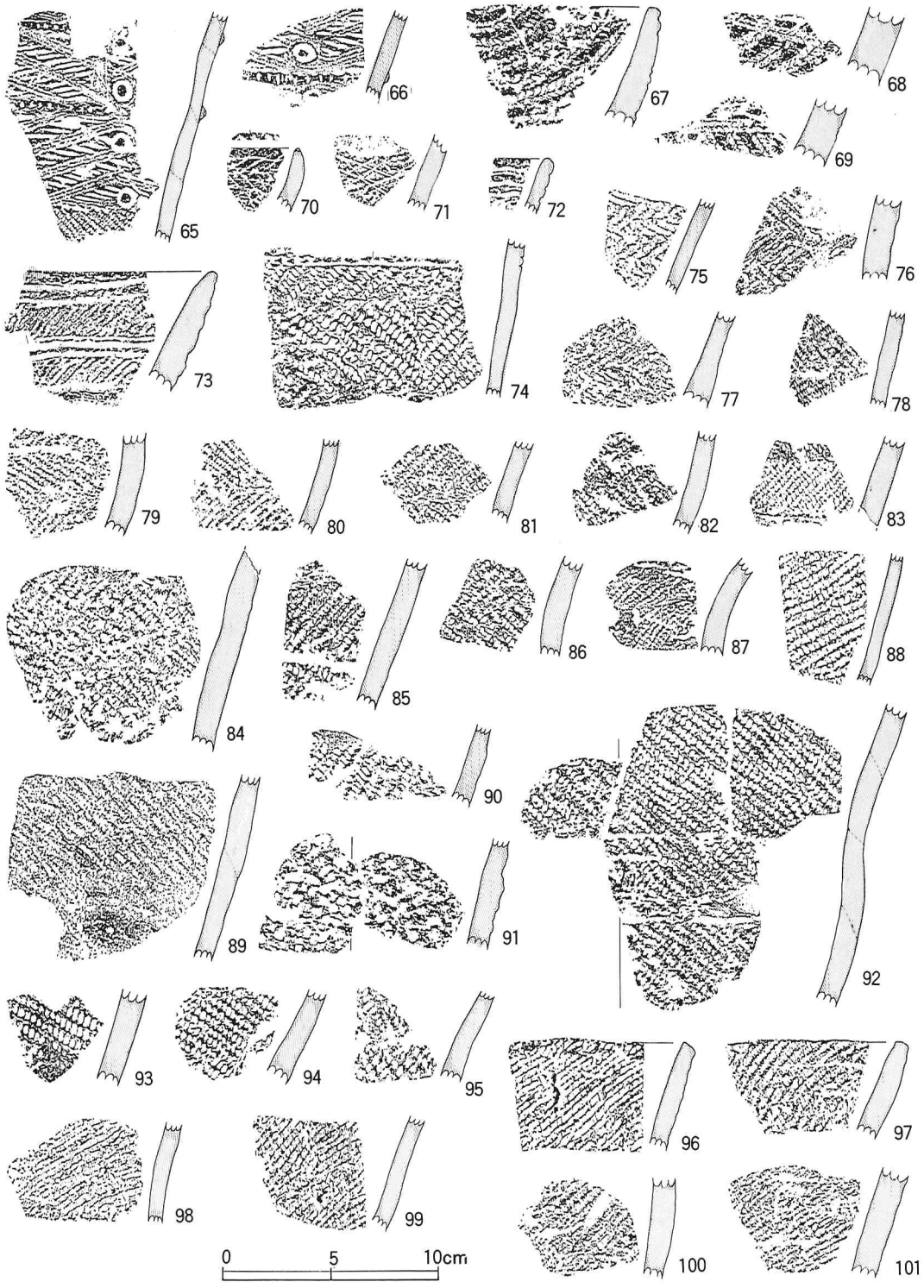
65，66，は口唇部を欠く。口縁部の文様帯は細い横位の隆帯によって区切られ，現存でも３段まで数えることができる。隆帯上には幅約2.5㎜の間隙で，細い棒状施文具の側面による刻み目が連続して施されている。隆帯間には０段３条の三本一単位の撚糸圧痕文（R$\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\\\ell\end{matrix}\right.$・L$\left\{\begin{matrix}r\\r\\r\end{matrix}\right.$・R$\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\\\ell\end{matrix}\right.$，太さ約0.7～1.3㎜）が斜位に間隔をおいて施されている。おそらく絡条体の回転によるものと思われ，巻きつけた原体の片側の端部は，蕨手状の圧痕文が施文されるように丸められている。その圧痕部，すなわち回転の１単位の区切りにあたる部分に円形竹管文（径約９㎜）が縦に各段２個ずつ施されている。撚糸圧痕文の間隙には細い棒状の道具による（太さ約1.3㎜）刺突文が連続して施されている。胴部には０段３条と思われる単節ＲＬの斜縄文が施されている。以下はおそらく羽状縄文を呈していたと考えられる。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には粗い縦方向の研磨が施されている。Ａ—10ｂグリッド出土。

67,68，69，は同一個体と思われる。口縁部は平縁でやや内弯ぎみに開く。二本一単位の撚糸圧痕文（R$\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\\\ell\end{matrix}\right.$・L$\left\{\begin{matrix}r\\r\\r\end{matrix}\right.$，太さ各約２㎜）が口縁部では同心円文状に施されている。胴部ではまず右下がり続いて右上がりに圧痕文が施された結果これらが交差している。この部分は０段の軸縄にこえらの撚糸をＲ巻にしたものとＬ巻にしたいわゆる絡条体による圧痕かもしれない。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には横方向の研磨が見られる。Ａ—10ｂグリッド出土。

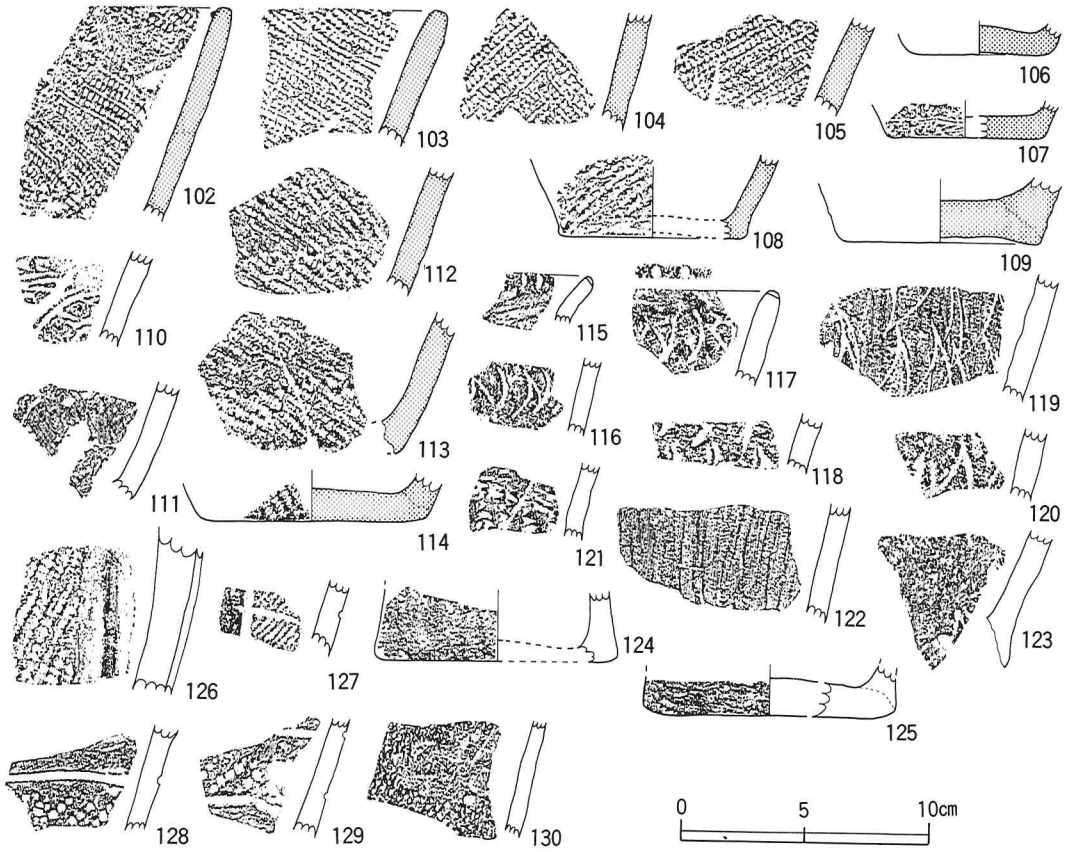
70，口縁部の破片である。口唇部は平縁でやや内弯ぎみに開く。口唇端部には幅約５㎜の間隔で棒状工具の背面による刻み目（幅約１㎜）が施されている。器面には０段の軸縄に０段のｒの縄を巻きつけた網目状撚糸文が施されている。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。Ｄ—12ｂグリッド出土。

71，胴部の破片である。無節のＬｒの横位の縄文が施され，そのうえに格子状の文様（幅約１㎜）が施されている。原体は固い蔓状のものを巻きつけた附加条のものか。色調は内外面ともに赤褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。Ｅ—11ｂグリッド出土。

72，口縁部の破片である。器面はなで調整され，横位の小波状文が施されている。原体は半截竹



第20図　各グリッド出土土器拓影１



第21図　各グリッド出土土器拓影２

管（幅約３㎜）及び棒状の工具（太さ約1.5㎜）によるものが一単位と思われる。色調は内外面ともに黒褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び細かな石英粒が含まれている。内面には横位の研磨が施されている。Ｄ―12ｂグリッド出土。

73，口縁部の破　片である。口唇部は平縁でやや外弯ぎみに開く。器面には無節のＬｒの斜縄文が横位に施され，その後に半截竹管（幅約８㎜）による横位の平行沈線文が三段にわたって施されている。その結果平行沈線内の器面は磨消されている。色調は外面暗褐色・内面黒褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び細かな石英粒が含まれている。内面には粗い横位の研磨が施されている。Ａ―10グリッド出土。

74，胴部の破片である。単節の斜縄文が横位に３段確認できる。最上段部には向かって右側には単節ＬＲ，左側にＲＬの横位の斜縄文が施されている。また半截竹管の押し引きによる連続爪形文（幅約３㎜）がめぐらされている（間隔約６㎜）。次段は逆に単節ＲＬ，ＬＲの横位の斜縄文が施され，羽状縄文を呈している。この両段では条が四角を囲んでいるようにみえる。最下段には

一部単節ＬＲの横位の斜縄文が施されている。色調は内外面暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面にはていねいな研磨が施され，外面にはススが付着している。Ｂ－９ｂグリッド出土。

75，胴部の破片である。

単節のＲＬ（施文幅約0.8cm）と同ＬＲ（施文幅約1.0cm）の斜縄文が横位に交互に６段施され，羽状縄文を呈している。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び砂粒が多く含まれている。Ｄ－12ｂグリッド出土。

76，胴部の破片である。単節のＲＬ（施文幅約1.7cm）と同ＬＲ（施文幅約1.7cm）の斜縄文が横位に交互に４段施され，羽状縄文を呈している。色調は外面ともに黒褐色・内面赤褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び砂粒が多く含まれている。内面にはていねいな研磨が施されている。Ａ－10グリッド出土。

77，胴部の破片である。無節のＬｒ（施文幅約1.7cm）と同Ｒℓ（施文幅約1.7cm）の斜縄文が横位に施され，羽状縄文を呈している。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び砂粒が多く含まれている。Ｆ－11ｂグリッド出土。

78，胴部の破片である。０段３条の単節ＬＲと同ＲＬ（施文幅約1.5cm）の横位の斜縄文が交互に施されている。原体の端部は結縛が解けた圧痕となっている。色調は外面暗褐色内面淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には粗い縦方向の研磨が施されている。Ｄ－12ａグリッド出土。

79，胴部の破片である。単節ＬＲと同ＲＬ（施文幅約3.0cm）の横位の斜縄文が交互に施され羽状縄文を呈している。色調は外面黒色一部淡褐色・内面淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。ていねいな横方向の研磨が施されている。Ｅ－11ｂグリッド出土。

80，胴部の破片である。０段３条の単節ＲＬと同ＬＲの横位の斜縄文が交互に施され羽状縄文を呈している。色調は外面暗褐色内面淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面にはていねいな横方向の研磨が施されている。Ｃ－12ｂグリッド出土。

81，胴部の破片である。単節ＬＲと同ＲＬの横位の斜縄文が交互に施され羽状縄文を呈している。ＬＲの縄に他条結縛がみられる。結縛はばらけた数本のｒの原体をＲ巻に結縛している。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面にはていねいな横方向の研磨が施されている。Ｅ－10ｂグリッド出土。

82，胴部の破片である。単節ＬＲと同ＲＬの横位の斜縄文が交互に施され羽状縄文を呈している。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。Ｆ－12ｂグリッド出土。

83，胴部の破片である。単節ＲＬと同ＬＲ（施文幅約2.5cm）の横位の斜縄文が交互に施され羽状縄文を呈している。ＬＲの原体の方は直前段多条（３条）撚りである。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。Ｄ－13ｂグリッド出土。

84，胴部の破片である。単節ＬＲと同ＲＬ（施文幅約２cm）の横位の斜縄文が施され一部は羽状

縄文を呈している。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には粗い研磨が施されている。Ｄ—13ｂグリッド出土。

85，胴部の破片である。単節ＬＲ（施文幅約3.2cm）と同ＲＬの横位の斜縄文が施され羽状縄文を呈している。単節ＲＬの斜縄文の末端は太さ0.5mm程度の細いｒの縄数本で結縛されている。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には粗い研磨が施されている。35の上部の破片であろうか。Ｃ—７ａグリッド出土。

86，胴部の破片である。単節ＬＲと同ＲＬの横位の斜縄文が施され羽状縄文を呈している。ＲＬの方の原体末端は太さ0.5mm程度の細いℓの縄数本で結縛されている。色調は外面淡褐色・内面暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には粗い研磨が施されている。Ｃ—11ｂグリッド出土。

87，胴部の破片である。単節ＬＲの横位の斜縄文が２段まで確認できる（施文幅約1.5cm）。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面にはていねいな研磨が施されている。Ａ—８ｂグリッド出土。

88，胴部の破片である。単節ＬＲの横位の斜縄文が２段まで確認できる（施文幅約3.5cm）。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には縦方向のていねいな研磨が施されている。なお外面にはスス状の炭化物が付着している。42と同一個体か。Ｂ—10ｂグリッド出土。

89，胴部の破片である。単節ＬＲと同ＲＬ（施文幅約２cm）の横位の斜縄文が施され一部は羽状縄文を呈している。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には粗い研磨が施されている。Ａ—10ｂグリッド出土。

90，胴部の破片である。単節ＲＬの横位の斜縄文が確認できる。上の方は研磨されており無文帯となっている。あるいは口縁部かもしれない。色調は外面赤褐色・内面黒褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び細かな砂粒が多く含まれている。内面には多量のススが付着している。Ｄ—10ａグリッド出土。

91，胴部の破片である。節の太い単節ＲＬの横位の斜縄文が確認できる。色調は外面暗褐色・内面黒褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び細かな砂粒が多く含まれている。Ｂ—１ａグリッド出土。

92，頸部から胴部にかけての破片である。単節ＲＬの斜縄文（施文幅約2.5cm）が横位に施され７段まで確認できる。色調は外面黒褐色下半淡褐色・内面暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面は横方向の粗い研磨が施されている。Ｂ—１ａグリッド出土。

93，胴部の破片である。単節ＲＬの斜縄文が横位に施されている。色調は外面暗褐色・内面赤褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には横方向のていねいな研磨が施されている。Ｂ—10グリッド出土。

94，胴部の破片である。単節ＲＬの斜縄文が横位に施され２段まで確認できる。色調は内外面と

もに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面には縦方向の粗い研磨が施されている。Ｂ—12ｂグリッド出土。

95，胴部の破片である。単節ＲＬの斜縄文が横位に施されている。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土には多量の繊維が及び微砂が含まれている。摩滅が激しい。Ｃ—12ａグリッド出土。

96，口縁部の破片である。平縁で，口唇部は外反しながら開く。口唇端部は無節のＬｒの斜縄文が横位に施され面をなしている。器面には口縁部から無節Ｌｒの横位の斜縄文が２段まで確認できる（施文幅約3.8cm)。色調は外面黒褐色・内面暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び微砂粒が含まれている。内面には横方向の粗い研磨が施されている。Ｃ—８ｂグリッド出土。

97，口縁部の破片である。平縁で，口唇部はやや内弯しながら開く。口唇端部は研磨され面をなしている。器面には口縁部から無節Ｌｒの横位の斜縄文が２段まで確認できる（施文幅約3.1cm)。色調は外面黒褐色・内面暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び微砂粒が含まれている。内面には口唇部が横方向以下は縦方向のていねいな研磨が施されている。Ｂ—９ｂグリッド出土。

98，胴部の破片である。無節Ｌｒの横位の斜縄文が２段まで確認できる（施文幅約2.8cm)。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び微砂粒が含まれている。内面には粗い横方向の研磨が施されている。Ｂ—10グリッド出土。

99，胴部の破片である。無節Ｌｒの横位の斜縄文が２段まで確認できる（施文幅約3.1cm)。色調は内外面とも赤褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び砂粒が含まれている。Ａ—10グリッド出土。

100，胴部の破片である。無節Ｌｒの横位の斜縄文が２段まで確認できる。色調は内外面ともに赤褐色を呈し，胎土には多量の繊維及び砂粒が含まれている。Ｂ—10グリッド出土。

101，胴部の破片である。無節Ｌｒの横位の斜縄文が施されている。色調は外面淡褐色・内面黒色を呈し，胎土には多量の繊維及び微砂粒が含まれている。内面には粗い横方向の研磨が施されている。あるいは73と同一個体か。Ｃ—12ａグリッド出土。

102～105は同一個体である。口縁部は平縁で，口唇部は直線的に開く。口唇端部は丸みをおび，研磨が施されている。２種類の横位の附加条縄文（単節ＲＬの軸縄に０段の縄１一本を附加（施文幅約2.5cm)，単節ＬＲの軸縄に０段の縄ｒを附加（施文幅約３cm))が施され一部羽状縄文を呈している。色調は内外面ともに赤褐色を呈し，胎土には多量の繊維が含まれている。内面にはていねいな横位の研磨が施されている。Ａ—10，Ｄ—12ａ，Ｃ—６ａグリッド出土。

106，底部の破片である。胴部の文様は不明である。色調は底面黒褐色・内面黒色を呈し，胎土には繊維及び細かな石英粒が多く含まれている。内外面ともに粗い研磨が施されている。やや上げ底を呈している。Ｃ—８ｂグリッド出土。

107，底部の破片である。単節ＲＬの横位の斜縄文が施された後，数条の横位の沈線文（幅約１mm）が施されている。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には繊維が多く含まれている。内面・底面ともに粗い研磨が施されており，やや上げ底を呈している。Ｂ—11ｂグリッド出土。

108，底部の破片である。単節ＬＲの横位の斜縄文が施されている。色調は内外面ともに暗褐色を

呈し，胎土には繊維が多く含まれている。A—10グリッド出土。

109，底部の破片である。器面には縄文が施されていたと思われるが摩滅のため詳細は不明である。色調は外面淡褐色・内面黒色を呈し胎土には多量の繊維が含まれている。やや上げ底を呈している。D—12aグリッド出土。

110，胴部の破片である。半截竹管による平行沈線文（幅約4.5㎜）によって肋骨文状の文様が施されている。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土に繊維は含まれず，石英粒が多量に含まれている。A—6bグリッド出土。

111，底部に近い胴部の破片である。焼成・胎土及び色調の感じから，110に近いが別個体である。無文であり器面に研磨が施されている。色調は内外面ともに暗褐色を呈している。胎土に繊維は含まれず，微砂が多量に含まれている。E—12bグリッド出土。

112，113，114，はおそらく同一個体である。胴部下半から底部にかけての破片である。単節のRL（施文幅約3㎝）の斜縄文が横位に2段確認できる。色調は外面暗褐色・内面黒褐色を呈し，胎土に繊維は少なく砂粒が多く含まれている。底面には粗い研磨が施されている。D—12bグリッド出土。

115，口縁部の破片である。口唇部は外反しながら開く。口唇端部には約5㎜の幅をおいて，連続した刻み目が施されている。原体は側縁部を断面三角形に尖らせた棒状の道具（幅約2㎜）によるものと思われる。器面は削り調整されている。色調は内外面ともに淡赤褐色を呈している。胎土に繊維は含まれず，細かな砂粒が多く含まれている。C—12aグリッド出土。

116，胴部の破片である。胴部の破片である。削り調整された器面に平縁の貝殻の腹縁で，波状文が施されている。色調は内外面ともに淡赤褐色を呈している。胎土に繊維は含まれず，細かな砂粒が多く含まれている。B—12a，C—12aグリッド出土。

117，口縁部の破片である。口唇部はほぼ直線的に開く。口唇端部には約7㎜の幅をおいて，刻み目が施されている。原体は棒状の道具（幅約3㎜）によるものと思われる。削り調整された器面には，平縁の貝殻の腹縁で波状文が施されている。色調は内外面ともに淡赤褐色を呈している。胎土に繊維は含まれず，細かな砂粒が多く含まれている。118はおそらく同一個体と思われる。C—12aグリッド出土。

119，胴部の破片である。粗い縦方向の研磨が施された器面に平縁の貝殻の腹縁で，波状文が施されている。色調は内外面ともに暗褐色を呈している。胎土に繊維は含まれず，砂粒が多く含まれている。A—12bグリッド出土。

120，胴部の破片である。削り調整された器面に平縁の貝殻の腹縁で，波状文が施されている。色調は内外面ともに淡赤褐色を呈している。胎土に繊維は含まれず，微砂が多く含まれている。B—11bグリッド出土。

121，胴部の破片である。なで調整された器面に，アナダラ属の貝殻の腹縁をやや横方向に押した波状文が施されている。色調は内外面ともに暗褐色を呈している。胎土に繊維は含まれず，微砂

粒が多く含まれている。内面には僅かに研磨の痕が認められる。C－9bグリッド出土。
122，胴部の破片である。無文であり，外面には縦方向のていねいな研磨が施されている。色調は外面赤褐色・内面黒褐色を呈している。胎土には繊維は含まれず，砂粒が多く含まれている。内面には縦方向のていねいな削りが施されている。B－10グリッド出土。
123，底部に近い胴部の破片である。無文であり，外面には粗い研磨が施されている。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土に繊維は含まれず，砂粒が多く含まれている。内面はなで調整されていたと思われるが，剝落が著しい。C－10aグリッド出土。
124，底部の破片である。無文であり，外面には粗い研磨が施されている。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土に繊維は含まれず，砂粒が多く含まれている。内面には粗い削り，底面には粗い研磨が施されている。B－9bグリッド出土。
125，底部の破片である。無文であり，外面には粗い研磨が施されている。色調は内外面ともに赤褐色を呈し，胎土に繊維は含まれず，砂粒が多く含まれている。内面には粗いなで，底面には粗い研磨が施されている。A－12bグリッド出土。
126，胴部の破片である。両側になで調整が施された縦位の隆帯（幅約9㎜，高さ約4㎜）が施され，その横に単節ＬＲの横位の斜縄文（施文幅約2㎝）が3段まで確認できる。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土に繊維は含まれず，砂粒が多く含まれている。内面には粗い横方向の研磨が施されているが，剝落が著しい。E－11bグリッド出土。
127，胴部の破片である。縦位の沈線文が施され，区画内に単節ＲＬの斜縄文が縦位に充塡されている。縄文が施されない部分には粗い縦方向の研磨が施されている。色調は内外面ともに淡褐色を呈し，胎土に繊維は含まれず，砂粒が多く含まれている。内面には粗い横方向の研磨が施されている。B－9bグリッド出土。
128，129，胴部の破片である。なで調整された器面に横位の沈線文が施され，その区画内に単節ＬＲの斜縄文が横位に充塡されている。縄文が施されない部分には粗い横方向の研磨が施されている。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土に繊維は含まれていない。内面にはていねいな横方向の研磨が施されている。外面にはすすが付着している。C－8グリッド出土。
130，胴部の破片である。疑似縄文が施されている。原体は植物の茎のようなものと思われ，穴の先端が円錐形に尖っている。色調は外面淡褐色・内面暗褐色を呈し，胎土に繊維は含まれていない。内面は板状の道具（施文幅約1㎝）によって横方向になでられている。外面にはすすが付着している。A－9aグリッド出土。

(2) 焼成された粘土塊

A－9bグリッドから生焼け状の粘土塊が4塊，総重量で92.1g出土した。笹類のような表面が滑らかな茎に一握りの粘土を巻きつけたり，刺突した様子がうかがえるものである（図版ＰＬ10参照）。土器製作工程の「練り」の一方法を示すものであろうか。胎土には細かな黄白色のロー

ム粒や微砂が含まれている。繊維及び1.2㎜の石英粒などが全く含まれていない点が，土器の胎土と比較して興味深い。

(3) 石　器

各グリッドからは打製石斧２点・磨石１点・磨石兼敲石１点 ・表裏に擦痕が認められる円礫１点の計５点の石器が出土した（第11図)。

６は小形の磨石であり扁平な両面に磨痕がある。長さ5.4cm，幅4.9cm，厚さ2.6cm，重量93.0ｇを計る。石質は安山岩であるが表面はかなり風化しており軟らかい感じである。Ｃ—11ｂグリッド出土。

７は磨石兼敲石である。約３分の１を欠損している。扁平な両面及び側面に顕著な磨痕があり，扁平な部分の中央部には集中的に敲き痕が認められる。残存長7.8cm，幅8.3cm，厚さ4.5cm，重量335.1ｇを計る。石質は安山岩。Ｅ—12ｂグリッド出土。

８は分銅形を呈す打製石斧である。一応完形品と考えられる。周縁部から粗い剝離が施され整形されているが，片面には自然面が大きく残っている。縦れ部の側縁部は両側とも刃潰しがなされている。長さ14.8cm，幅9.1cm，厚さ2.8cm，重量355.9ｇを計る。石質は千枚岩。Ｃ—６ａグリッド出土。

９は分銅形を呈す打製石斧である。約３分の２を欠損している。周縁部から粗い剝離が施され整形されているが，８同様片面には自然面が残っている。残存長6.9cm，幅8.8cm，厚さ2.5cm，重量131.4ｇを計る。石質は千枚岩。Ａ—７ｂグリッド出土。

３は10同様，表裏に擦痕が認められる円礫である。扁平な片面には2.7・1.8cm二本の線状の傷が認められる。他にも表面及び側面に細い線状・爪形・楔形の傷が集まってあたかも鼠歯の嚙みあと状になっている。傷の長さは１～３㎜と10に比べると短いのが特徴である，幅は広くて１㎜，深さは深くて0.5㎜程度である。長さ4.2cm，幅3.1cm，厚さ0.7cm，重量15.0ｇを測る。石質は安山岩であるが表面はかなり風化しており軟らかい感じである。Ｃ—９ｂグリッド出土。

5　出土遺物についての分析

(1) 土器の分類

本遺跡から出土した土器は次の２群14類に大別できる。このうち遺跡の主体となる第１群の土器については細別を試みた。

第１群　胎土に繊維を含む土器群である。

第１類　口縁部の肥厚，撚糸圧痕文，刺突文，刻み目を有す細い隆帯文，刺突文を有す太い隆帯文などの要素が組み合わされるもので，前期初頭の花積下層式に比定できるものである。

ａ　口縁部が肥厚し，撚糸圧痕文に刺突文が施される（第10図１，４)。

ｂ　口縁部が肥厚し，撚糸圧痕文に半截竹管による格子状文が施される（同５)。

c　口縁部が肥厚し，刺突文が施される（同６，９）。

d　口縁部が肥厚し，羽状縄文が施される（同12）。

e　口縁部が肥厚せず，撚糸圧痕文に刺突文・刻み目を有す細い隆帯文が施される（同８，第20図65，66）。

f　口縁部が肥厚せず，撚糸圧痕文に刺突文が施される（第10図２，３）。

g　口縁部が肥厚せず，刻み目のない細い隆帯文に羽状縄文が施される（同11）。

h　口縁部が肥厚せず，刺突文を有す太い隆帯文隆帯文に撚糸圧痕文が施される（同10）。

i　口縁部が肥厚せず，刺突文を有す太い隆帯文隆帯文に斜縄文が施される（同７）。

第２類　連続した小波状文，Ｓ字状沈文が施されるもので，これらは前期中葉の大木2a式に比定できる。

a　小波状文が施される（第10図13～16，第20図72）。

b　Ｓ字状沈文が施される（第10図17）。

第３類　網目状撚糸文などが施されるもので，大木2a式ないしは黒浜式に比定できる。

a　撚糸が付加されたもの（第20図70）。

b　蔓状のものが付加されたもの（同71）。

第４類　半截竹管によるコンパス文，平行沈線文，連続爪形文などが施されるもので，前期中葉の黒浜式に比定できる。

a　コンパス文が施される（第10図18，19，21）。

b　地文が縄文で平行沈線文が施される（第20図73，107）。

c　地文が無文で平行沈線文が施される（第10図20，22）。

d　地文が縄文で連続爪形文が施される（第20図74）。

第５類　地文のみ確認できるもので，ａ・ｂ類は花積下層式，他は一部大木2a式を含むが，大半は黒浜式に比定できる。

a　貝殻腹縁の連続刺突文が施される（第10図23）。

b　０段多条，無節の縄による羽状縄文が施される（第10図24～29，第20図75，76，78～80）。

c　単節のＲＬ，ＬＲの縄による羽状縄文が施される（第10図30，32～35，第20図77，81，82，84，86）。

d　無節の斜縄文が施される（第10図31，36～41，第20図96～101）。

e　単節のＬＲの斜縄文が施される（第11図42～44，第20図87～90，第21図108）。

f　単節のＲＬの斜縄文が施される（第11図45～55，60，第20図91～95，第21図112～114）。

g　附加条縄文が施される（第21図102～105）。

h　異条斜縄文が施される（第11図57）。

i　絡条体圧痕による撚糸文が施される（同56）。

第６類　該当不明の底部（第21図106，109）。

第２群　胎土に繊維を含まない土器群である。

第１類　半截竹管による文様などが施されるもの，及び胎土が類似するもので，前期後葉の諸磯ａ式期に比定できるものである（第21図110～111）。

第２類　貝殻腹縁文が施されるもの，及び胎土が類似するもので，前期後葉の浮島Ⅲ式に比定できるものである（第11図61，62，第21図115～125）。

第３類　地文に斜縄文が施されるもので，諸磯ａ式であろうか（第11図58，59）。

第４類　半截竹管文に貼瘤文が施されるもので，諸磯ｃ式に比定できる（同63）。

第５類　縄文原体の端部圧痕文が施されるもので，中期の所産であろうか（同64）。

第６類　磨消縄文が施されるもので，中期後葉から後期中葉のものである（第21図126～129）。

第７類　疑似縄文が施されるもので，おそらく弥生時代中期のものであろう（同130）。

第８類　土師器片及び内耳土器片

(2)　土器の編年的位置

本遺跡から出土した土器は住居跡内出土品を含めていずれも小破片であり，けして良好な資料とは言い難いものであった。ここでは土器のまとめとして，分類を通じて観察された所見から各土器群の編年的な位置付けについて考えてみることにする。

まず花積下層式土器である。第１群第１類がその口縁部資料である。本遺跡から出土した該期の土器は口縁部が肥厚し複合口縁状を呈するものが多い。中でも住居跡内の覆土中から出土したものは文様の重畳化するものが少なく，文様も，撚りの方向の異なった数本の撚糸を１単位とする撚糸圧痕文，連続刺突文，円形刺突文，刻みを有する隆帯文の組み合わせに限られるものであった。これらの資料は文様要素から，下村克彦氏の指摘する「新田野段階花積下層式」に類似するものと考えられるが，口縁形状に古式の様相を残していると考えられる。いずれにしても花積下層式のなかでは新しい段階に含まれるものである。第5a 類，第5b 類としたものは貝殻背圧痕文及び０段３条の撚りの異なった横位の斜縄文によって羽状縄文を呈するものであり，該期のものであろうと考えられる。

次に第２類である。これらは東北地方南部を中心に分布する大木 2a 式に類似するものである。第２類には口縁部に波状文が施されるものと，胴部に「Ｓ字状沈文」が施されるものである。本遺跡資料の波状文をみると宵宮西遺跡・赤沼遺跡で出土している資料と比べると，櫛歯状の工具を用いず，半截竹管に沈線を組み合わせて同様の効果あげている点及び原体の差か施文の深さが浅い点に相違がみられる。「Ｓ字状沈文」は大木 2b 式に特徴的なものであるが，本遺跡のものはそれらとは異なるものである。

第３類は網目状撚糸文及びそれに類似する沈線による格子状の文様が施されるものである。黒浜式に属するものか，大木 2a 式に属するものかは不明である。

第４類及び第５類は黒浜式に属するものである。本遺跡の土器は半截竹管ではコンパス文及び

頸部の粗い爪形文，平行沈線文がある。口縁部は平縁で，頸部は括れるものが多いようである。縄文は結束しない羽状縄文を呈するものが多く数では斜縄文を凌いでいる。なお単節の縄文と無節の縄文を比較した場合，単節のほうが圧倒的に多い。若干ではあるが附加条縄文，絡条体による撚糸文（第１種），異条斜縄文が含まれている。しかし黒浜式の古式のものに多いループ文や，正反の合の縄文は一片も含まれていない。また新しい段階に特徴的である肋骨文（木葉文）や磨消縄文を有するものも全く含まれていない。このことは今回出土した土器群が黒浜式の中では中位に位置するものであることを示唆しているものと考えられる。これらの土器群は新井和之氏の黒浜式第Ⅲ段階，鈴木素行氏の黒浜Ⅲ期に相当するものと考えられる。県内での類似した資料としては，野木町野渡貝塚の住居跡出土のものが，最も近いものと思われる。また近接した遺跡では，聖山公園遺跡で出土した住居跡にも同一の時期に属するものと思われるものがある。

第２群土器ではある程度の数が出土した第２類についてのみ記すことにする。本遺跡から出土しているものは，口唇端部に斜位の刺突が施され，口縁部から連続した波状文が施されている。波状文は器面をやや削り込む感じに施されているものである。また浮島Ⅲ式のメルクマールである三角文が欠如している点，及び，共伴すると考えられる諸磯式が僅少である点も指摘できる。

(3)　石器について

今回出土した石器の帰属時期を考える時，すべてが黒浜式期に属するものとするには躊躇をおぼえる。特に分銅形打製石斧２例は諸事例を検討しても該期のものではなく，おそらく中期以降の所産と考えられる。これを差し引いても出土した前期の石器数は８点であり，あまりにも少ない。この現象は諸氏が指摘するように，当時の古東京湾奥部の遺跡に見られる一般的状況を示しているといえる。しかし石器数の希少性が住居跡を中心とした生活の場への廃棄の少なさを示しているのか，当時の石器の絶対数がこれほどまでに少なかったのかは別問題であり，今後の検討をさらに要すると思われる。

次に各石器の原石採集地について簡単に記すことにする。

まず遺跡に最も近い，段丘下を流れる姿川河床で採集できる石材を選んでみると，チャート・石英類・安山岩がその範疇に含まれる。他の石材の類例を求めると，磨製石斧の原石である緑色岩は，秩父地方を中心に分布する御荷鉾（みかぶ）緑色岩類に，打製石斧の原石である千枚岩は同じ秩父地方の三波川変成帯付近のものに類似するようである。また黒曜石は透明度の高さ及び粒子の様子から高原山産以外のものと思われるので，理化学的な分析を試みたいと思っている。

石材に関しては明かに交易の結果によるものと思われるものが出土しており，今後各遺跡において，土器以外にも慎重な分析姿勢が必要とされるものと思われる。

V　ま　と　め

以上が，本遺跡において検出された遺構及び遺物の内容である。今回の発掘調査に際しては，Ⅰの「調査に至るまでの経過」でも簡単に触れたとおり，上欠遺跡との関係を確かめるということが，第一の目的であった。特に，県内でも最大級の縄文時代集落跡として注目を集めた上欠遺跡が，はたしてどの程度の拡がりを持っているのかという点について，一つの目安がつくものと期待されたわけである。そして，結果的には，本遺跡において上欠遺跡と直接結びつくような遺構，遺物の検出がなかったということから，恐らく上欠遺跡集落の南への拡がりは，本遺跡との間に納まるであろうという目安が得られたわけである。このように，当初の目的は一応達せられたことになるが，やはり前章で詳しく述べたとおり，縄文時代中期の集落跡である上欠遺跡とは時代を異にする前期の集落の一部を検出するに至ったことが，今回の調査における最も大きな成果であったと言える。ここでは，もう一度検出された住居跡と出土土器の特徴を整理するとともに該期周辺地域の様相を概観し，本報告のまとめとしたい。

住居跡の形態

平面形は，ほぼ東西に長軸をとる隅丸長方形であるが，短辺である南北長が一定せず，西側に行くに従って少しずつ狭くなるのが特徴である。柱穴は，住居内にほぼ方形に配された4本と長軸線上で壁際に配された2本の計6本が主柱穴とみられるが，本住居跡を最も特徴付けるのは壁際に多数配された小柱穴である。これらは，間隔は不統一であるが，ほぼ列状をなしている。なお，炉跡は，住居内のやや西寄りである。

出土土器の様相

土器の出土は少なく，住居跡内から141片，グリッド出土のものを合せても僅か250片程度という量である。住居跡内出土土器の様相は，第1次埋没土層内に主体を占める黒浜式と第2次埋没土層内に主体を占める花積下層式の大略2つに分けることができる。従って，本住居跡の時期を決定するものとしては前者の黒浜式，すなわち縄文時代前期中葉となるわけであるが，後者の状況は近辺にさらに古い時期の集落が存在したことを示すものとして見逃がせない事実である。なお，少量ではあるが大木2a式に類似した土器の出土は，東北地方南部との関連を考える上で，貴重なものと言える。

集落の拡がり

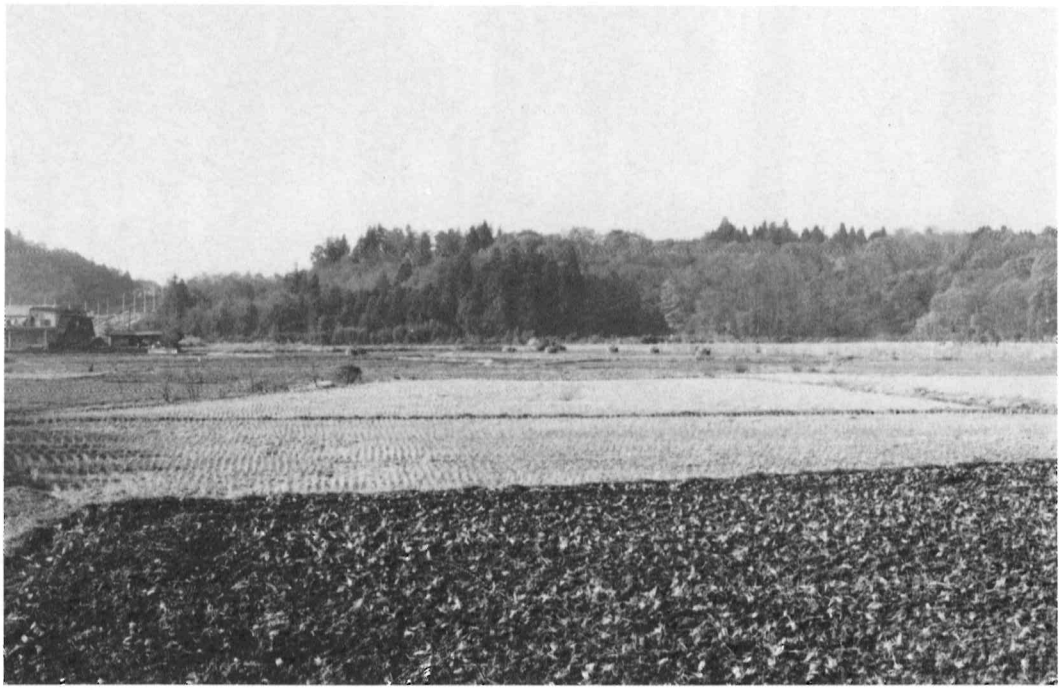
今回の調査で確認したものが集落の一部にしか過ぎないということは，明らかなことである。検出された住居跡の位置から判断すれば，集落の拡がりは南か東へ向っているものとみられる。また，その規模については，立地する台地の幅等から考えても，上欠遺跡などの大きさは到底持ち得なかったものと考えてよいであろう。

本遺跡を含む姿川流域が，古くから縄文時代遺跡の豊庫として知られていたことは，Ⅱの「地形と環境」の中でも述べたとおりである。しかし，その集落の立地や構成など，内容的な実体が解明され出したのは，近年，発掘調査が頻繁に行なわれるようになってからであることは言うまでもない。とりわけ，前期集落に関しては不鮮明の度が濃かったわけであるが，ここ４・５年来，壬生町下坪遺跡，鹿沼市流通センター内遺跡，そして宇都宮市聖山公園遺跡と調査事例が目立って増えてきている。恐らく，姿川流域という地域的規模で，縄文時代前期集落の実体の解明に着手できる時期も，そう遠くはないものと思われる。このような状況の中で，今回，本遺跡において検出された資料が今後大いに意味をもってくることは，十分期待されるところであろう。

引用・参考文献

新井和之，　1981：黒浜式土器小考追録（その１）。奈和，19．奈和同人会，市川。
1982：黒浜式土器。縄文文化の研究，縄文土器Ⅰ。雄山閣，東京。
下村克彦，　1981：新田野段階花積下層式土器と二ッ木式土器について。奈和，19．奈和同人会，市川。
鈴木素行他，1985：原町西貝塚発掘調査報告書。古河市史資料第９集，古河。
田代　寛，　1970：野渡貝塚発掘調査概報。栃木県史編さん室，宇都宮。
寺内武夫，　1981：下野野渡貝塚發掘調査報告。栃木史心会報，12．宇都宮。
長嶋雄一他，1983：赤沼遺跡試掘調査報告。原町市教育委員会，原町。
芳賀英一他，1984：胄宮西遺跡。福島県会津高田町文化財調査報告書第５集。会津高田町教育委員会，福島県会津高田町。

図　　版



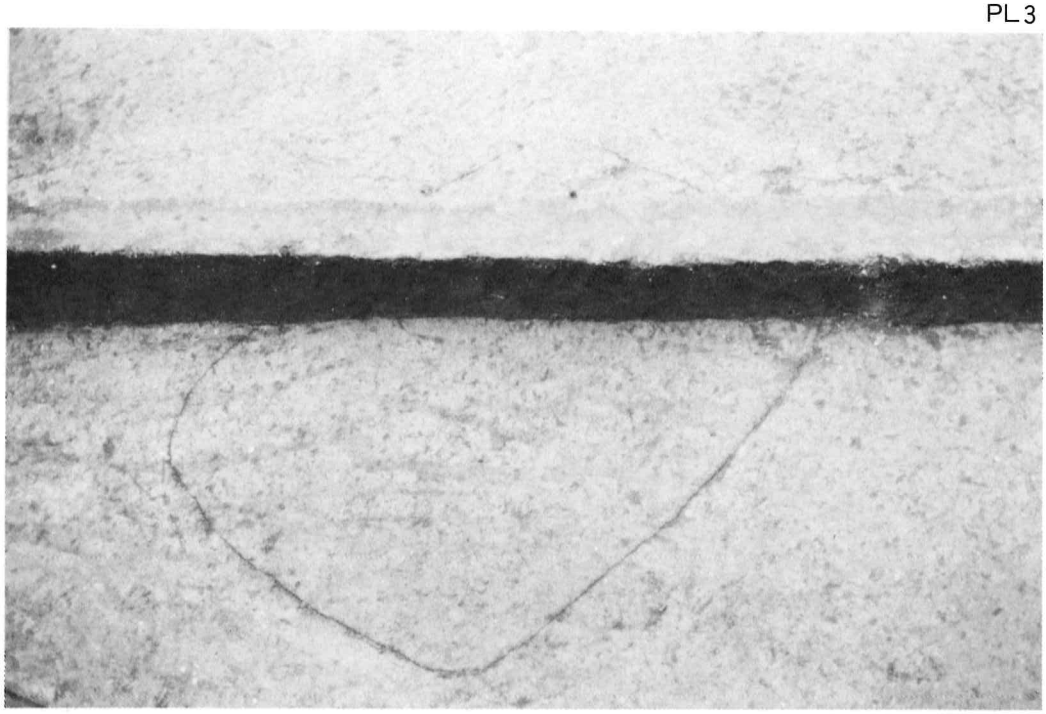
(1) 遺跡遠景（東から）

(2) 遺跡を載せる台地の断面（南から）

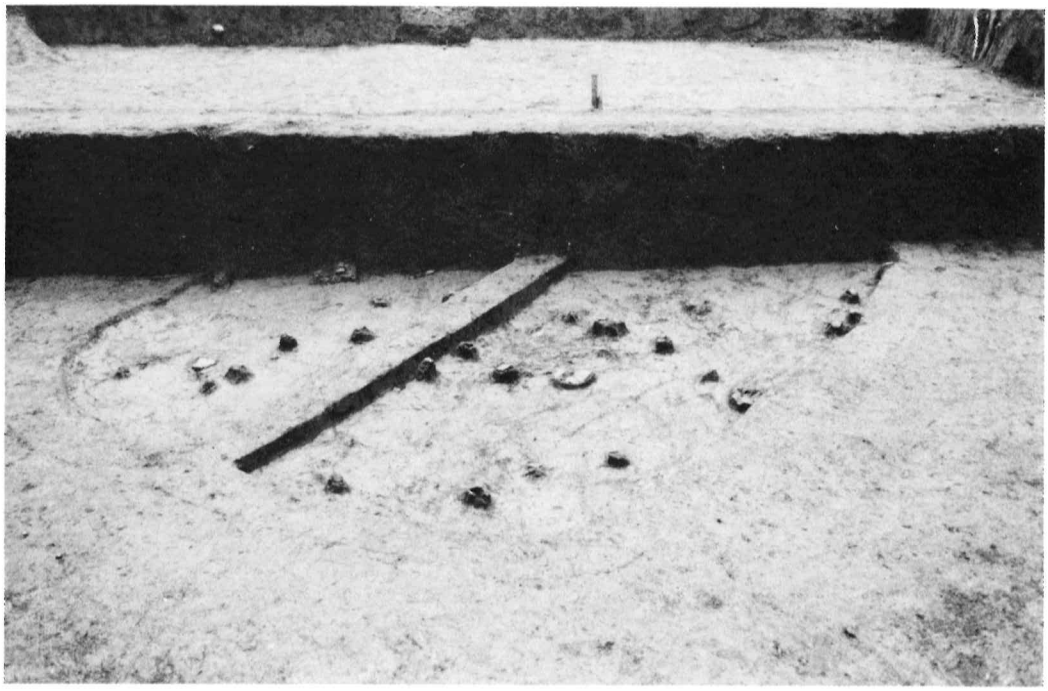
PL.2

(1) グリッドの設定状況（南から）

(2) 試掘状況（東から）

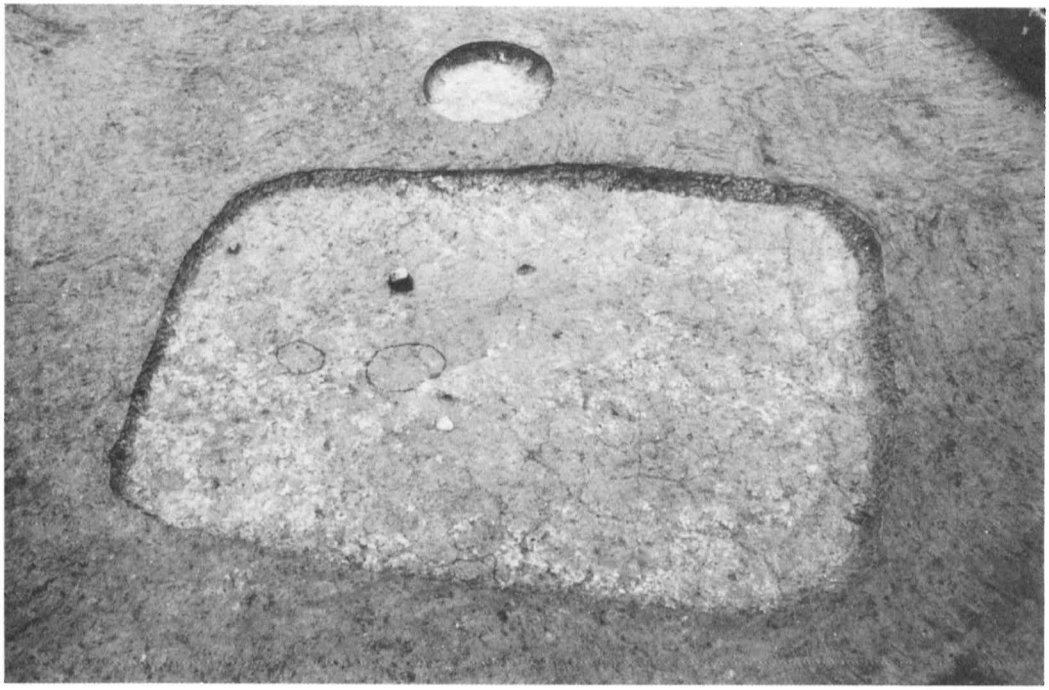


(1)　住居跡確認状況(北東から)

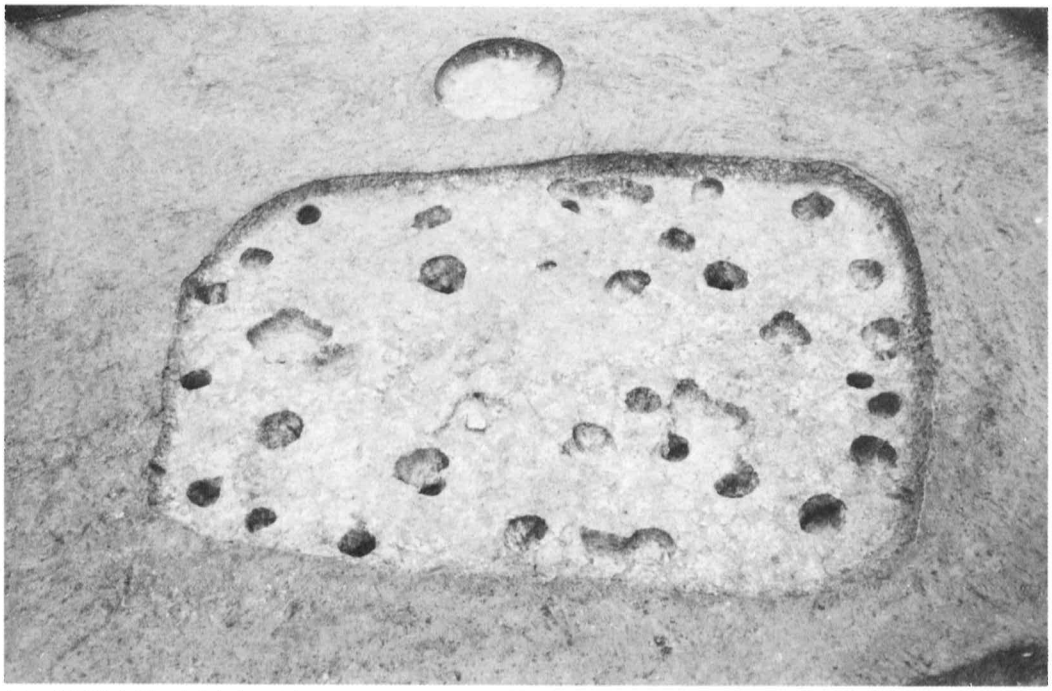


(2)　住居跡遺物出土状況(北東から)

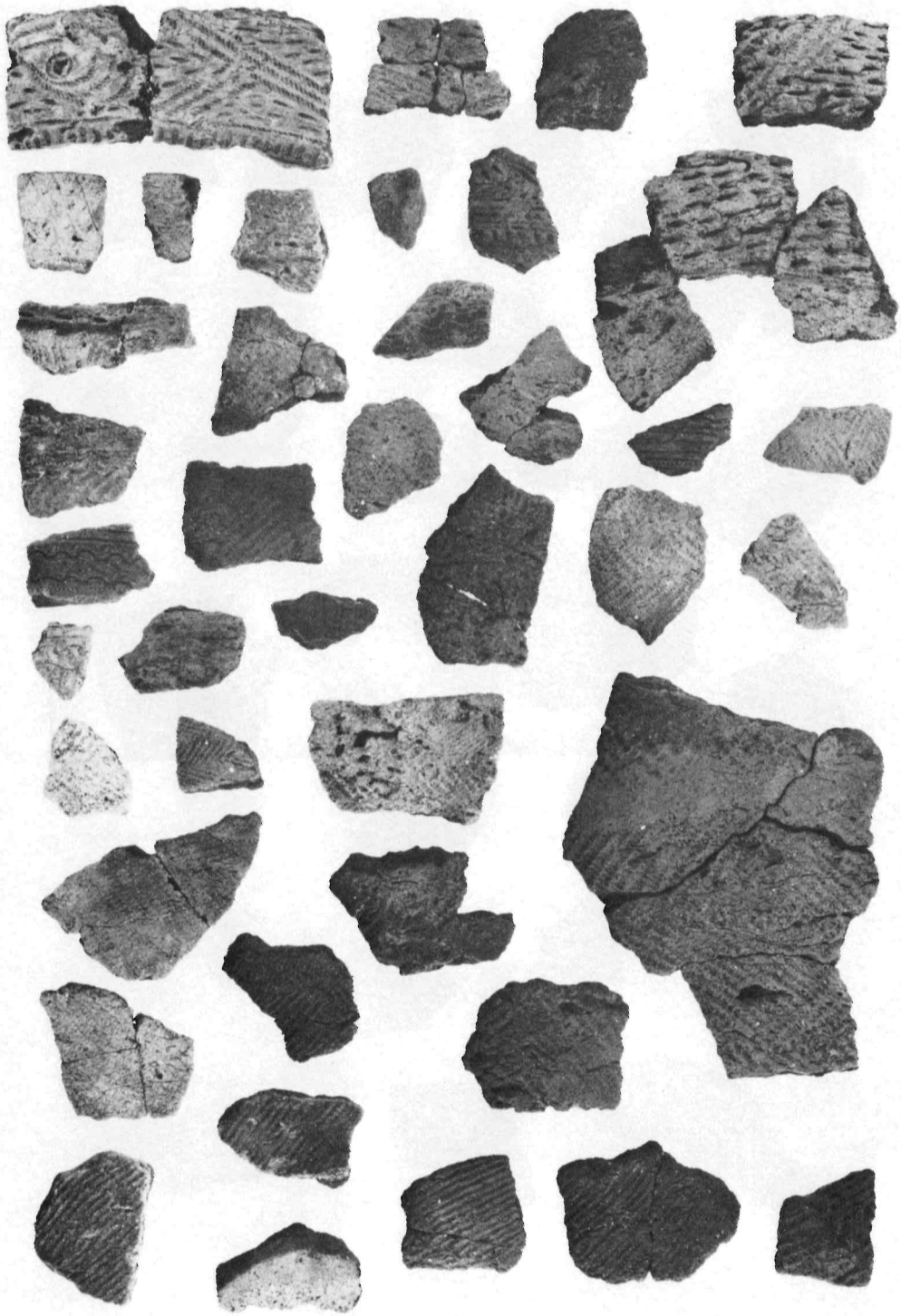
PL 4



(1)　住居跡全景 1（南上方から）

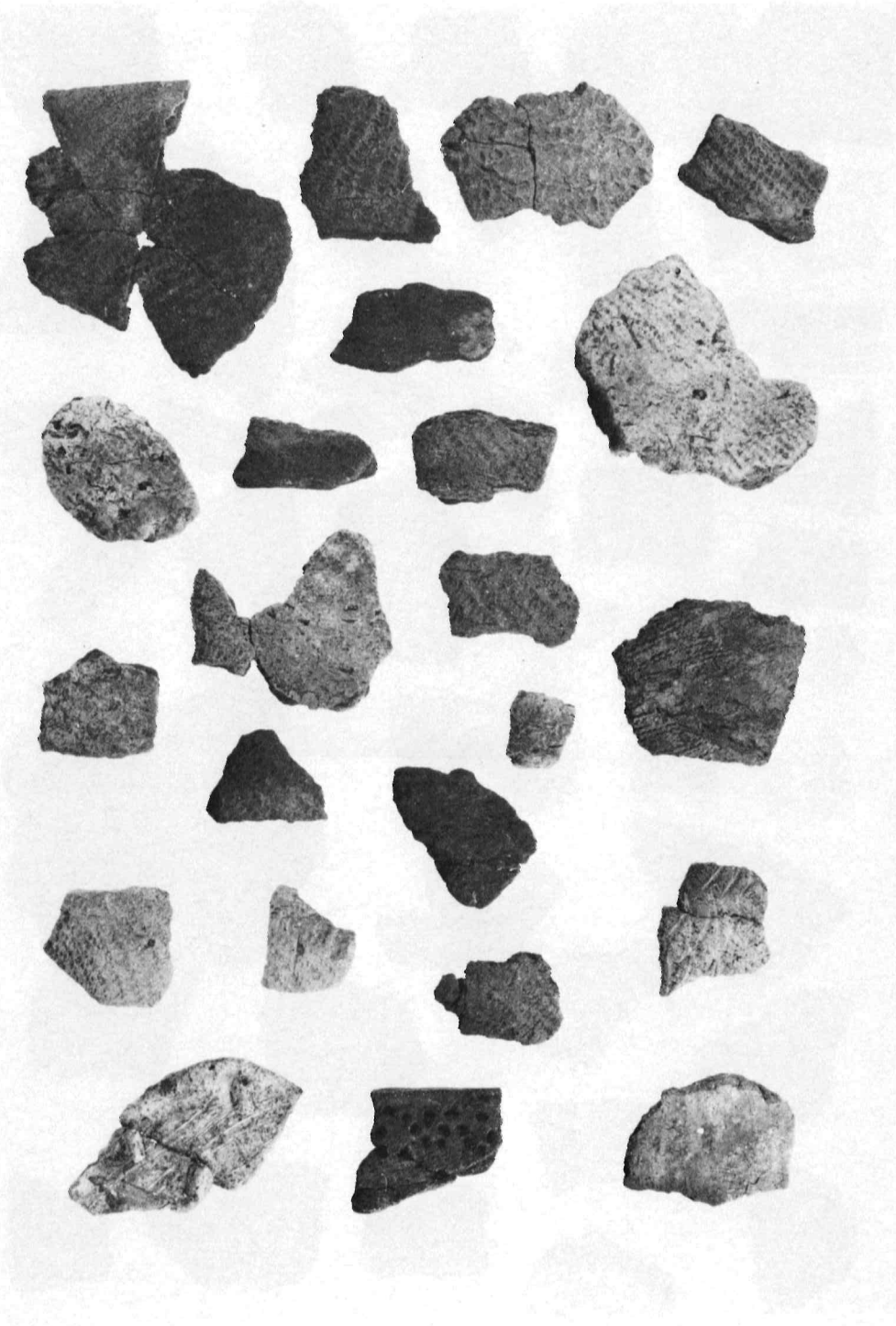


(2)　住居跡全景 2（南上方から）

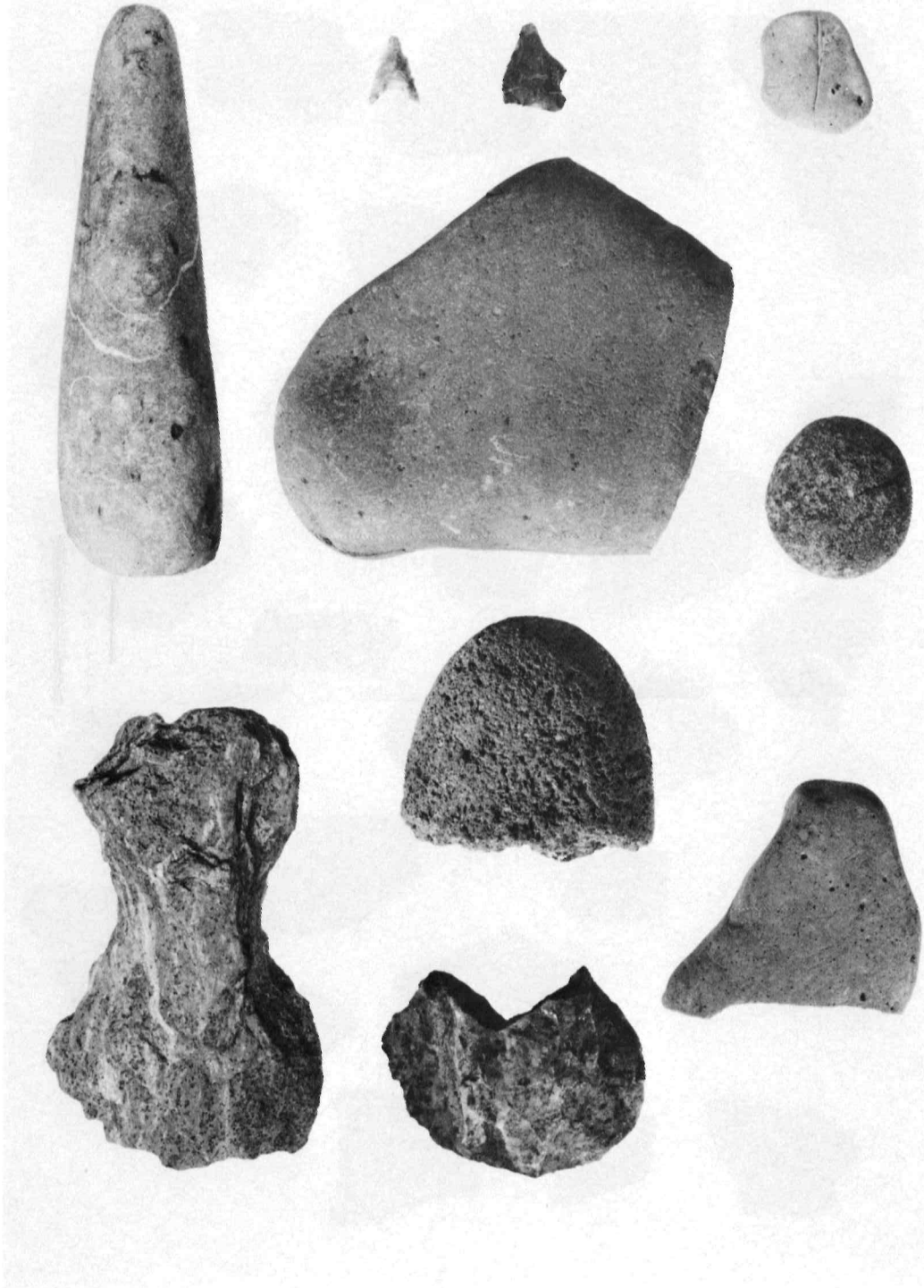


住居跡出土土器 1

PL 6

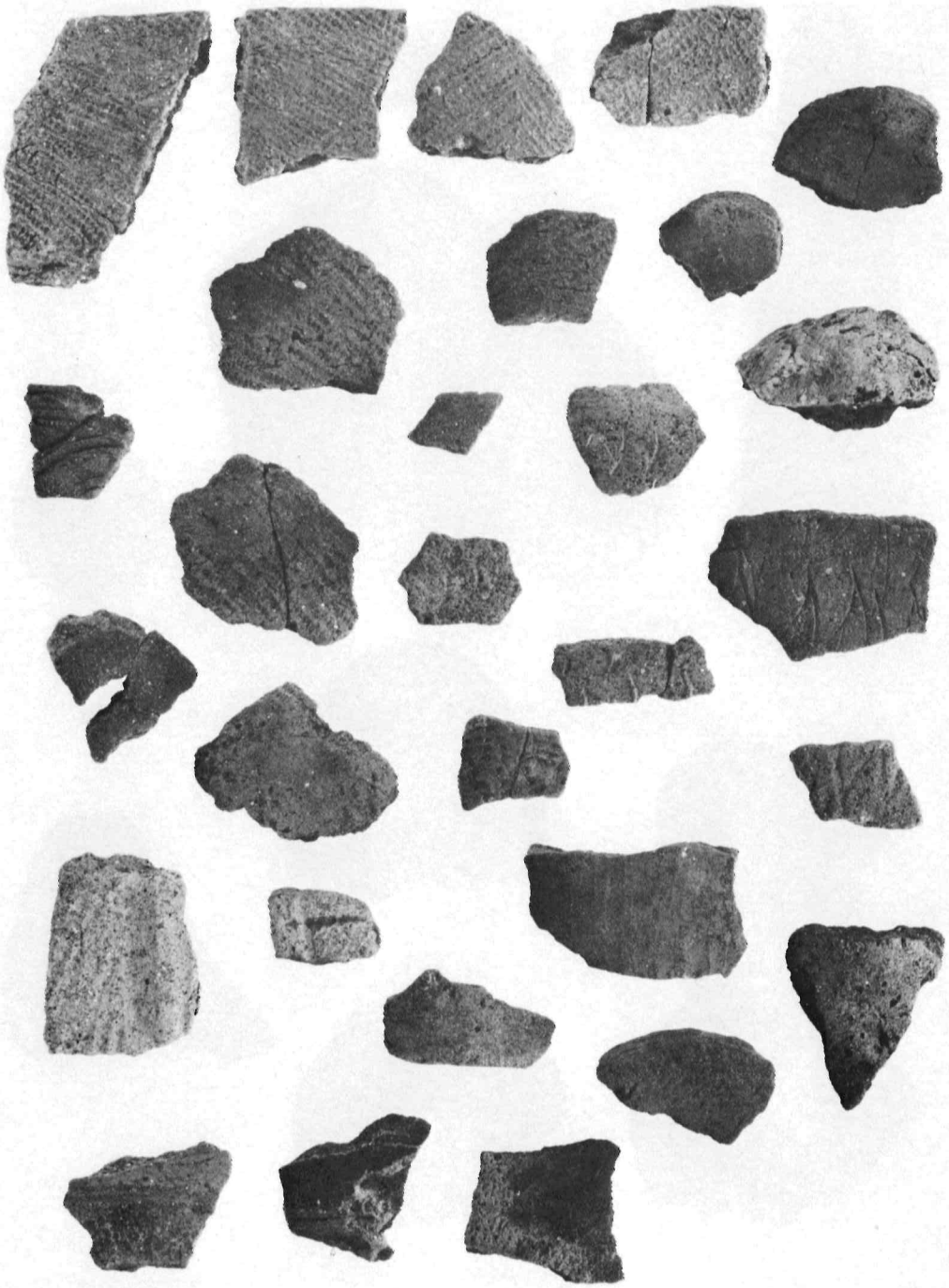


住居跡出土土器 2

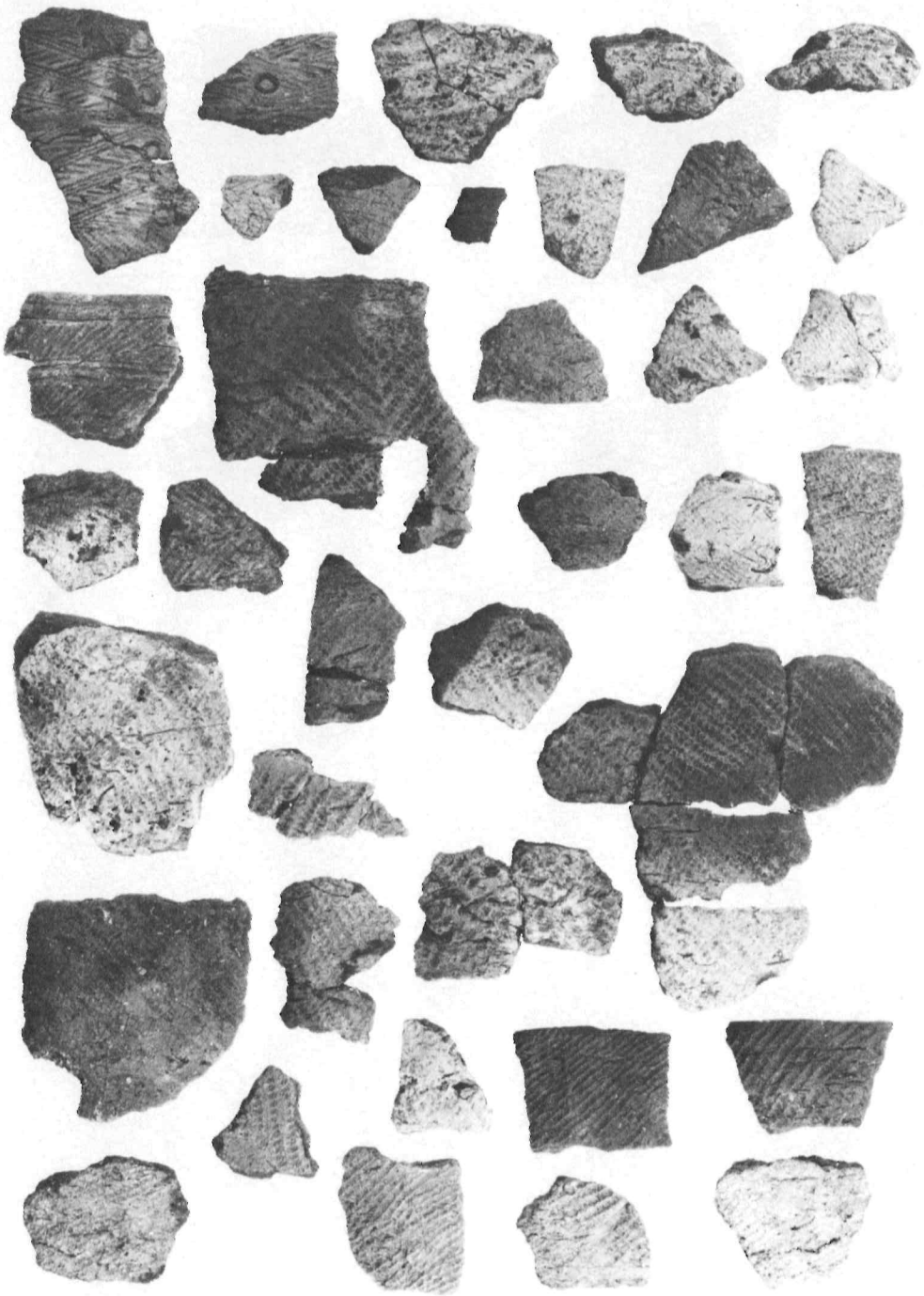


上欠南遺跡出土石器

PL.8

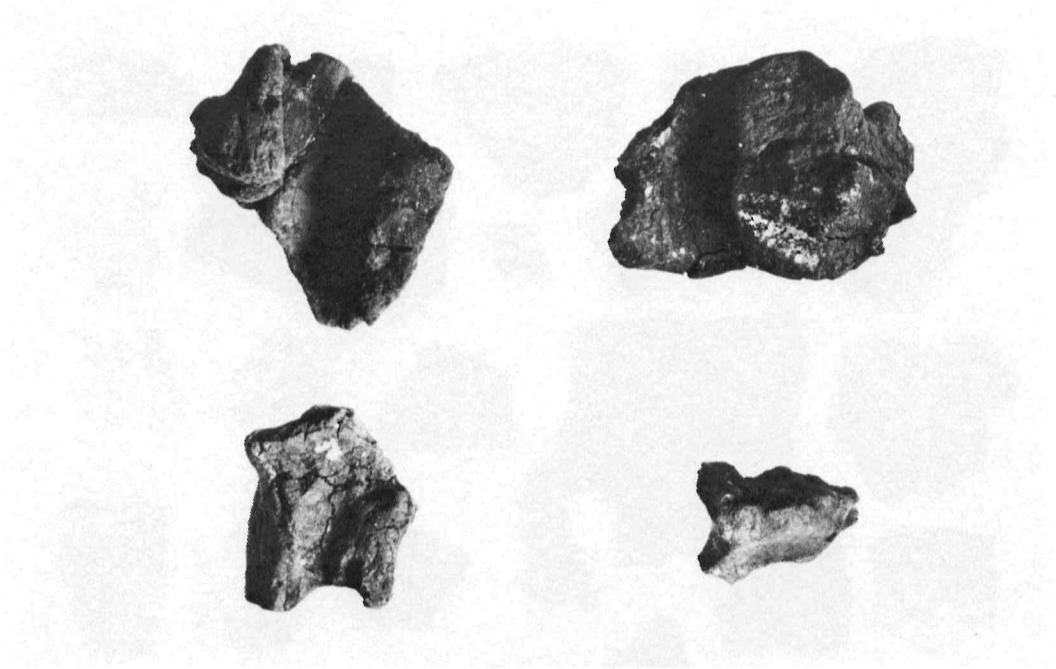


各グリッド出土土器1



各グリッド出土土器 2

PL10



焼成された粘土塊

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第20集

上 欠 南 遺 跡

昭和61年３月発行

発　行　宇都宮市教育委員会社会教育課

（宇都宮市中央１－１－13）

TEL（0286）37－2111

印　刷　㈱松井ピ・テ・オ印刷